中央に見える横長の建物が、展示をリニューアルした原爆資料館の本館。花と平和の祭典「ひろしまフラワーフェスティバル（ＦＦ）」が開かれた５月３～５日も大勢の見学者が詰めかけました

学ぼうヒロシマ
高校生新聞'19

発行所
広島市中区土橋町7番1号
〒730-8677
中国新聞社
電　話 (082) 236-2111
（受付案内台）

2-11　記憶を受け継ぐ
12 13　被爆樹木・建物
14 15　Q＆A
16 17　平和記念公園
18 19　読書
20　漫画
21　ヒロシマの10代
22 23　ワークシート
24　サダコと折り鶴

HIROSHIMA BELONGS TO THE WORLD
協　賛
広島国際文化財団

記憶を受け継ぐ

体内のガラスとともに

動員先の朝礼後。20人の仲間息絶える

米沢 峯子さん(86)
＝広島市西区

「このガラスは原爆を受けた記念。あの世まで持っていく」。米沢（旧姓山中）峯子さん(86)の右腕には、あの日の爆風で降り注いだガラスのかけらが今でも刺さっています。13歳の夏からともに生きてきたガラス片は、傷口から奥深くに入り、筋肉が巻き付きました。

軍人だった父清さんの赴任に伴い旧満州（中国東北部）で暮らした米沢さん。1943年に一家で帰国した翌春、安田高等女学校（現安田女子中高）に入学しました。しかし勉強した記憶はほとんどなく、米沢さんたち2年生も45年8月1日から楠木町（現西区）の誉航空軽合金（誉航空工場）へ動員されます。

アルミの棒を細く削る作業が女学生に課せられた任務。あの日の朝も白い鉢巻きを着けて「出勤」しました。8時ごろから広場で始まった朝礼の後、旋盤まで戻って座ったとたん、背後の赤れんがの壁ががらがらと崩れ落ち、砕け散った窓ガラスが右半身に突き刺さりました。

爆心地から約1・8キロ。次々にがれきが覆いかぶさり、トンネルの出口のような明かりが見える方へ無我夢中ではい出ました。手袋を裏返したようにどろっとはがれた皮膚をぶらさげて歩く人や、戦闘帽の部分だけ髪が残った兵士たちが歩いてきます。

状況を把握できないまま太田川沿いを北上し、大芝公園へ。座り込んでいると突然、血だるまの女性が奇声を上げて走り回り、目の前でばったり倒れました。どこからか小さな男の子が泣きながら近寄ってしがみつくと、女性は男の子を振り払い、また駆けだします。「男の子のお母ちゃんだったと思うんよ。この世の地獄よ」

ようやく古市（現安佐南区）の国民学校までたどり着き、一夜を明かした後、友人の父親に連れられて、打越町（現西区）の自宅へ戻りました。その間、両親は娘の死を覚悟していたようです。93年に亡くなった清さんの手記には、娘の遺体を見つけたらおぶって帰ろうと、帯を手に捜し歩いた様子が書かれています。

安田高女では、中心部で建物疎開作業をしていた1年生を含め、315人の生徒と教職員13人が犠牲になり、誉航空工場に動員された20人の仲間も息絶えました。「朝礼の真っ最中だったら…」。ちょっとの差が生死を分けたのです。

戦後も、少女たちには過酷な日々が続きました。爆心地から1・4キロの西白島町（現中区）にあった旧校舎は全壊。近くの陸軍工兵隊兵舎跡地への移転が決まり、生徒たちは毎日のように金づちを持って片付けに駆り出されました。

「塀の下から白骨化した兵隊さんが出てきたときは、みんなで震え上がった」と言います。

両親は爆風で傾いた自宅を改装して「丸中旅館」を開業、戦地から戻る軍人たちを受け入れました。52年には、新藤兼人監督がヒロシマの悲劇を世界中に伝えた名作映画「原爆の子」のロケ一行が宿泊します。

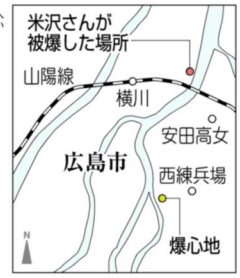
原爆で生き残り、数年後に教え子らを訪ね歩く主役の教師を演じたのが、乙羽信子さん。映画の中では友人との会話で右腕を触り、語りました。ここに入ったガラスのかけらをいつまでも残しておきたい、と。「8月6日を忘れんようにね」。このせりふは米沢さんと新藤監督の雑談から生まれました。

被爆者の夫の実さん(91)とともに、両親から継いだ旅館は94年に廃業し、今は自宅で、長女がグアテマラ人の夫とお好み焼き店を営んでいます。各国の人たちが訪れ、英語やスペイン語が飛び交う毎日。「この店のように、いろんな国の人が自由にしゃべって、憎しみ合わず、助け合ってほしい」と思っています。（桑島美帆）

2018年11月5日掲載

15歳ごろの米沢さん

無数のガラスを浴びた工場跡に立つ米沢さん



キーワード

建物疎開

取り壊して延焼を阻止

建物疎開は、空襲による火災の延焼を防ぐために、あらかじめ建物を取り壊して空き地をつくる作業のことです。

戦時中、全国の都市で行われ、広島市では1944年11月に国の指示を受けて開始。市役所や県庁、軍需工場が燃えたら困る、という理由で、その周りの家などを強制的に立ち退かせました。戦時中は、全ての国民が戦争に協力するよう法律で決められていたのです。

兵隊や、地域と職場ごとに編成された国民義勇隊の大人が、柱にくくり付けた綱を引っ張って家を引き倒しました。今の中学生以上に当たる動員学徒の主な役目は、がれきの後片付けです。

広島市の原爆資料館によると、動員学徒の犠牲者は6千人前後と考えられており、多くが建物疎開の作業中でした。原爆資料館の南側に面する平和大通りは、当時の防火帯の名残です。

原爆資料館には、学生服や「形見」となった弁当箱や服などの遺品が多く寄贈されています。今年4月25日にリニューアルして開館した本館で、数多く展示されています。

広島市竹屋町（現中区）付近で建物疎開の作業をしている様子を描いた絵（浜田義雄さん作、原爆資料館所蔵）

私たち10代の感想

願い 私たちが応えたい

まだガラス片が残っている米沢さんの腕を見せてもらいました。腕の中で、ガラスが静かな存在感を放っている気がしました。「このガラスは取らない」という言葉からは、あの日のことを忘れないようにするため、という思いが伝わってきます。「憎しみ合わず、平和になってほしい」。米沢さんの願いに私たちが応えなければならない、と強く感じました。（高1川岸言織）

今ある幸せ 大切にする

当時の米沢さんは私たちと同じ学生でしたが、勉強や遊びは許されず、毎日鉢巻きをして工場で部品を造っていたそうです。原爆でたくさんの生徒が亡くなり、終戦後も新しい校舎を建てるための作業に当たるなど、青春を奪われた日常が続きました。つらい生活を送る中、小さな希望や幸せを見つけた生き方を知り、今ある幸せを大切にすることを学びました。（高1斉藤幸歩）

記憶を受け継ぐ

家族全員助かってしまった。後ろめたさ今も

女生徒犠牲 父と伝える

宮川 裕行（みやがわ ひろゆき）さん(88)
＝広島市西区

16歳の宮川さん

「家族5人が全員、助かってしまった」―。基町高（広島市中区）で長年、英語教諭を務め、平和活動にも心血を注いだ宮川裕行さん（88）。73年前のあの日から、「申し訳ない」という後ろめたい気持ちが消えることはありません。

宮川さんの父、造六さん（1975年に74歳で死去）は、広島市立第一高女（市女、現舟入高）の校長でした。45年8月6日朝、造六さんは、爆心地から約500㍍の木挽町（現中区中島町）にいました。教職員7人と市女の1、2年生約540人が建物疎開作業に当たっていたからです。

朝礼後、生徒が作業を始めたのを見届けて、造六さんは広島駅近くの県庁学務課へ向かいます。その直後に原子爆弾がさく裂。まだ13歳前後の少女たちと同僚は、熱線や爆風をもろに受け、全員焼き殺されました。

爆心地から2・3㌔離れた皆実町（現南区）の自宅には宮川さんと母トモヱさんしかいませんでした。空襲に備え弟は八本松町（現東広島市）へ学童疎開に。妹は父の故郷、香川県へ疎開していたからです。広島高等師範学校付属中（現広島大付属高）4年の宮川さんは近所の陸軍被服支廠へ勤労奉仕に通っていましたが、あの日は顔に湿疹ができ、自宅で休んでいました。

うだる暑さの中、上半身裸で本を読んでいると、B29の爆音が聞こえてきます。「えらい低空だな」。裏庭に出て空を見上げたとたん、天にも届きそうな真っ黄色の火柱が立ち、背中と左頬に熱を感じました。

気が付くと、コンクリートの塀とトイレの塀の間にうつぶせに倒れ込んでいました。顔や左手、背中がやけどでヒリヒリ痛みます。目の前には壁がどさっと落ち、家のガラス戸や、しょうじが全部吹き飛んで、まるで大地震の後のような光景が広がっていました。

「ひろちゃーん」。母親が呼ぶ声の方へ出てみると、トモヱさんが表の畑の柵にしがみついて震えていました。自宅の横を、何百人という人が押し寄せてきます。みんな肌がどす黒く服はボロボロで裸同然。体の至る所から血を流し、幽霊のようでした。

帰宅した父親と3人で比治山の麓の防空壕へ。壕の中は血だらけの人でぎゅうぎゅう詰めになりました。顔を真っ赤にやけどした少女が泣き叫び、全身焼けただれた女性が「痛い、助けて」とうめいているのに誰も手を差し伸べません。みんな常軌を逸していたのです。

翌日から造六さんは舟入川口町（現中区）の市女に泊まり込み、生徒の安否確認に追われます。「子供がまだ帰らんのですが何か消息でもありませんか」。宮川さんの日記には、自宅にも保護者が訪れ、うなだれて帰る様子が記されています。「学校でも『娘を返してくれ』と父は随分責められたようだ」と宮川さん。

その後、京都大文学部に進学。米軍占領下の51年、京大の学生たちが京都市内で開いた「原爆展」に参加し、被爆者から体験を聞き取った「原爆体験記」も発行しました。非道な原爆の実態を明らかにした原爆展は大きな反響を呼びます。

60歳で定年退職したころ、宮川さんは修学旅行生に被爆証言を語り始めたほか、在韓被爆者支援にも乗り出しました。「韓国の被爆者は放置されている。何とか助けたい」と、何度も現地を訪れ、支援にまい進したそうです。

造六さんは生前、市女の同窓会の追悼記に「平和大橋を通る毎に今もその生徒の姿が目に浮かびやるせない悲しみに胸が傷む」とつづっています。「特別なことじゃのうても一日一日を無事に暮らせる平和は最高なこと。戦争の犠牲になることは二度と起こってほしくない」。米寿を迎えた宮川さんの切なる願いです。（桑島美帆）

2018年8月6日掲載

市女の慰霊碑の前で原爆の犠牲になった少女たちについて語る宮川さん

キーワード

原爆展

世界各地で惨禍伝える

写真パネルや被害を物語る実物資料、犠牲者の遺品を日本国内と世界各地で一時的に展示するものです。

広島市と長崎市は被爆50年の1995年から「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」を共催し、米国やインド、ロシアなど19カ国49都市で実施しています。会場に被爆者を派遣し、体験を現地の市民の前で語ってもらっています。

きっかけは90年代の米国です。首都にある博物館が、広島に原爆を投下した爆撃機の機体の一部と一緒に被爆資料を展示しようとしましたが、「原爆が日米間の戦争を終わらせた」と退役軍人たちから猛反発を受け中止されました。広島、長崎両市は、原爆資料館を訪れる機会がない人にも原爆の恐ろしさを知らせなければ、と原爆展を始めたのでした。

これとは別に広島市は、米国各地の市民団体と連携し、2007年から約3年をかけて全50州で「全米原爆展」を開きました。

国際協力機構（JICA）の青年海外協力隊員らも、世界中の赴任先で開催しています。日本各地の自治体も、広島市と共催しています。市民や教育機関の活動も後押ししようと、原爆資料館は展示用ポスターなどを提供しています。

南アフリカのヨハネスブルクで現地の大学などが主催した原爆展の様子（2017年）

私たち10代の感想

申し訳ない思い 衝撃的

宮川さんのお父さんは「自分たちだけ助かって」「うちの娘を返して」と責められたそうです。「家族が無事だったことは幸運というより申し訳ない気持ちが強かった」とつらそうに話す宮川さんの言葉は衝撃的でした。「生きること」すら後ろめたいものへと変えた原爆。きっと目に見えない傷を抱えた人はまだまだいるはずです。今後の活動で出会い、学びたいと思います。（高1佐藤茜）

韓国の被爆者 学びたい

仲間と一緒に長年、在韓被爆者支援に取り組んだ宮川さん。韓国では、被爆者への関心は低く、支援制度もなかったそうです。被爆体験を語り継ぎ、平和学習も盛んな広島とのギャップを感じました。私は外国人被爆者の存在は知っていましたが、支援制度に大きな差があったことは今回初めて知りました。視野を広げ、韓国の被爆者について、もっと学びたいと思います。（高1目黒美貴）

記憶を受け継ぐ

大やけどの顔 風に激痛

あの日の制服携え「過ちから教訓を」

寺川 光人さん(87)
＝広島市佐伯区

1950年ごろの寺川さん

焼け焦げた袖。血がにじむ襟元。寺川光人さん(87)が1945年8月6日に着ていた制服です。大やけどに苦しんだ記憶と、懸命に看病してくれた家族の愛が刻まれています。

八幡村（現・佐伯区）の農家に次男として生まれた寺川さんは、県立広島商業学校（現県立広島商業高）2年生でした。戦争で授業はなく、15歳の誕生日だったあの日の朝も、建物疎開作業に動員されるはずでした。

広島駅から当時は皆実町（現南区）にあった校舎に向けて同級生と歩いていた時のことです。現在の広電比治山下駅の辺りで強烈な光に襲われました。爆心地から約1・8キロ。近くの避難用の壕に飛び込みましたが、顔の右半分や右腕、後頭部を熱線が直撃しました。

とにかく逃げよう―。比治山に登ると、眼下の街は火の手が上がっています。広島駅に行くとホームの枕木からも火が出ており、列車は走っていません。火の海となった市街地を避け、北の方角から大きく遠回りしながら己斐駅（現西広島駅）へ。「ホームにあった水道の蛇口に群がり、傷口を冷やした。今も駅の上り線ホームを通ると思い出す」

広電荒手駅（現草津南駅）から先は路面電車が動いていました。超満員の車両に必死にしがみつきました。焼けて垂れ下がった頬が風にペラペラとなびき、激痛にうめいたそうです。五日市駅で心配そうに待っていた父と再会したのは夕方でした。

大変だったのは、その後です。意識を失い、「ええ男を台無しにしたのお」という祖母の涙声で目覚めたのは3日後。鏡に映った顔は右半分が真っ黒になり膨張していました。「どうなるのか…」。頬や鼻の下にうじがはい回りました。「苦しみは痛みだけじゃない。うみの臭い。猛烈なかゆみ」。放射線による下痢やだるさもあり、寝たきりになりました。

あらゆる手を尽くしてくれたのが母フジヨさんでした。火葬場で人骨を拾って粉にし、油で練って頬に貼ったことも。奇跡的に、傷が少しずつ薄くなり、体調も回復していきました。

翌年春、広島商に復学。生徒と教職員計137人が被爆死していました。「負傷した者も多かったが、懸命に生きるその姿に、自分も頑張ろう、と励まされた」。学校制度の改革で1年間、観音高（西区）にも通いました。「女子生徒と机を並べ、生徒会役員は選挙で選んだ。戦争中は考えられなかった。これが民主主義だ、と思ったよ」

快活でスポーツ好きの寺川さんは19歳で小学校で体育を教え、働きながら大学卒の資格と教員免許を取りました。56年にカヅ子さん(84)と結婚し、2女に恵まれました。小学校の校長を退職してからも地元学区の体育協会や子どもの安全を守る活動のまとめ役として忙しくしました。

制服を捨てなかった理由を亡き母が語ったことはありません。寺川さんは「子どもまで無差別に殺す戦争の愚かさに対し、強い思いがあったのでは」と想像します。地域で被爆体験を語る機会があれば、制服を携え「歴史の過ちから教訓を学ぼう」と伝えています。

あの日の制服を手に「被爆体験を話す時、触ってもらうようにしている」と語る寺川さん

八幡村では45年7月、米軍機が墜落。パラシュートで脱出した米兵を発見しました。「敵だと信じ込んでいたから、怖くて近づけなかった」。米兵は捕虜となり、翌月被爆死しました。寺川さんは「そんな時代に戻ってはならない。平和のため国同士、人同士が仲良くするのが一番」と力を込めます。

「脅しのための兵器は真の友好を妨げる。核兵器はなくすべきだよ」

（金崎由美）

2018年5月8日掲載

キーワード

米兵捕虜

広島で被爆 祈念館に遺影

広島で被爆した米軍の兵士たちもいます。犠牲になったのは12人とされています。被爆者の森重昭さんは遺族を捜し出して交流や慰霊を行っており、2016年には広島を訪れた米国のオバマ大統領（当時）と対面しました。

米兵はなぜ広島にいたのでしょうか。1945年7月28日、彼らが乗る米軍機が呉沖などに飛来し、日本の戦艦を攻撃しました。この戦闘で、米軍機のタロア号やロンサムレディー号などが撃ち落とされ、乗組員たちが捕虜として広島市中心部の軍の施設に収容されたのでした。

8月6日に原爆が投下され、米兵は即死したり、10日以上たって亡くなったりしました。原爆ドーム近くの相生橋で米兵捕虜の遺体を見たという証言も残っています。平和記念公園の国立広島原爆死没者追悼平和祈念館には、複数の米兵の遺影が登録されています。

相生橋付近で亡くなっていた米兵捕虜を目撃した市民の絵（山田須磨子さん作、原爆資料館所蔵）

長崎では、第2次世界大戦中にオランダ領東インド（現インドネシア）で旧日本軍の捕虜になった兵士約300人が収容されており、オランダ兵7人と英国兵1人が被爆死したとみられています。

私たち10代の感想

体験の伝え方 考えたい

寺川さんは顔や腕に大やけどを負いましたが、現在目立った外傷があるようには見えません。家族の懸命さが奇跡を起こしたのだと思いました。ある日突然戦争によって苦しい体験を強いられた15歳の少年の気持ちを、現在に生きる僕たちが想像することは簡単ではありません。どれだけ理解し、自分の言葉に置き換え、周囲に伝えることができるか考えていきたいです。（高2川岸言統）

核抑止力の問題 教わる

「国と国は仲良くしなければならないが、核保有は友好発展を妨げる」という一言が心に残りました。核兵器自体が相互不信を招く。使われなければそれでいいのではなく、だから廃絶すべきだ、という意味でしょう。とても分かりやすく「核抑止力」の問題を説明してくれました。後日、韓国と北朝鮮の首脳会談のニュースに接して、寺川さんの言葉の通りだと思いました。（高2鬼頭里歩）

記憶を受け継ぐ

南方特別留学生と野宿

市民助けようとした若者たち 忘れない

21歳ごろの栗原さん

栗原 明子さん(91)
＝広島市安佐北区

広島市安佐北区のケアハウスに、栗原（旧姓高橋）明子さん(91)は暮らしています。広島に原爆が投下された当時は19歳。広島女学院専門学校（現広島女学院大）の2年でした。

1945年8月6日は東洋工業（現マツダ）へ学徒動員中でした。爆風で吹き飛ぶガラス片でけがをし、逃げてきた被爆者の救護に当たりました。しかし亡くなるのを見守るしかなかったといいます。

火の手に阻まれ、広島市大手町（現中区）の自宅跡へ戻れたのは翌7日。母兼子さんと妹尚子さんは久地村（現安佐北区）へ疎開していたので、県立広島病院の眼科医だった父の謙さんの安否だけが気掛かりでした。無数の死体やけが人にも心を動ぜず、必死に歩いて帰りました。

父の姿はなく防火水槽に燃えかすで「明子ゲンキ」と書き残し、広島赤十字病院へ捜しに行きます。途中、道に転がる黒い塊を見て足が止まりました。抱くとぬくもりが伝わり、手や頭の形に「赤ちゃんかな」と気付いた時、初めて悲しみが湧いてきました。

父が見つからず肩を落とした時、向かいの広島文理科大（現広島大）から出てきた友人に会いました。涙を流して抱き合い、大学の中へ。その場にいて紹介されたのが同大で学ぶ南方特別留学生の6人でした。

広島で被爆した外国人の中には、現在のマレーシアやインドネシア、ブルネイから来た彼らもいました。被爆後の1週間を大学の中でともに過ごしました。

留学生6人は一緒に生活していた「興南寮」や大学で被爆しました。「メイコ、もう怖くないからね」と慰められ、打ち解けました。以前、寮のそばで夕涼みする彼らを見たことはありましたが、話をするのは初めて。晩は校庭でイモをゆでて食べ、寝転がって休みました。

8日には留学生と食料を探した自宅跡で、父と自分を捜しに来た母と出会います。その日から、大学を拠点に父を捜しに回る毎日が始まりました。見つからず戻っても「元気出して」と励まされました。彼らも自分の母を「お母さん」と慕いました。実の母が恋しかったでしょう、「かわいそう」とも思いましたが、にぎやかな日々に勇気づきました。

終戦前日の14日まで一緒に暮らす中、留学生から被爆後、川べりにいた女学生を救おうといかだに乗せたものの流された話を聞きました。配給の食料も代わりに取りに行ってくれました。異国で大変な目に遭っても行動する彼ら。夜は寮から持って逃げたバイオリンを演奏してくれ、心が和みました。

終戦後、母と向かった久地村で体調を崩しました。口の中はただれ、髪も抜け「死ぬかも」と恐怖におびえました。その間も母は父を捜し、県立広島病院で建物の下敷きになった最期を知りました。

冬に復学し、貧しい暮らしでアルバイトをして卒業しました。比治山にできた米国の原爆傷害調査委員会（ABCC）に48年から勤め、生活に余裕が出ましたが、21年間の勤務を「すごく葛藤があった」と振り返ります。原爆を落とした国が、被爆者のことを調査する機関だからです。

こうした体験を語ってきましたが、やはり心に残るのが南方特別留学生です。被爆死したのは2人。うち1人は大学で別れて帰国の途に就く前、京都で亡くなりました。彼らの存在が、歴史の陰に埋もれないよう語り継いでいます。「被爆しても市民を助けようとした若者たちのことを忘れないで」

（山本祐司）

当時の様子が描かれた絵を手に南方特別留学生との日々を語る栗原さん

2018年3月5日掲載

キーワード

南方特別留学生

東南アの若者 8人被爆

南方特別留学生が住んだ「興南寮跡」に立つ記念碑

広島で被爆した人の中には、東南アジアの若者もいました。南方特別留学生と呼ばれ、旧広島文理科大（現広島大）の留学生。9人のうち8人が被爆し、2人が亡くなりました。

9人は現在のインドネシア、マレーシア、ブルネイの出身です。日本は第2次世界大戦中、東南アジアから有力者の家庭の優秀な青年を1943年と44年に日本各地の大学に留学させました。

背景には「大東亜共栄圏」の建設というスローガンがありました。欧米の植民地支配に代わり、日本を中心としてアジアの共存共栄を目指すとした構想ですが、実際には日本のアジア支配を正当化するものでした。南方特別留学生の制度も、日本に協力的な指導者を育てる意図からでした。

戦後帰国した留学生は国会議員や首相などの要職に就いて日本との橋渡し役として活躍しました。原爆資料館はリニューアルして開館した本館に「外国人被爆者のコーナー」を新たに設けて広島で被爆した南方特別留学生を紹介しています。

私たち10代の感想

安らぎをくれた優しさ

被爆後、南方特別留学生と過ごした栗原さん。あまりにひどく変わった街の姿に心が止まっていましたが、彼らと出会い「楽しかった」と思える1週間になりました。私には想像しにくい話ですが、悲しみがあふれる中で「お兄さん」のような人たちが安らぎをくれたのでしょうか。留学生は少しも愚痴を言わなかったと聞き、すごく優しい人たちだなと思いました。（中1林田愛由）

米国の施設で仕事 驚き

栗原さんが戦後、原爆傷害調査委員会で働いた話に、私は最も驚きました。栗原さんは広島の数多くの人たちの命を奪った国の施設で働き始めたものの、生活が楽になったので、憎しみは我慢するしかありませんでした。私が同じ立場だったら、と考えました。身近な人が殺されたことが許せなくて、その場にいられないと思います。

（中3フィリックス・ウォルシュ）

記憶を受け継ぐ

猛火 死体あふれる川へ

家族身を寄せ 布団かぶって耐えた

大田 金次さん(79)
＝広島市中区

6歳の大田さん

「原爆という非人間的な過ちは決して繰り返されてはならない。そう叫び続けたいほどの気持ち」。大田金次さん(79)の強い思いは、爆心地から900メートルの近さで被爆し、家族で猛火を逃げた記憶が幼心に深く刻み込まれているからです。

現在の中区広瀬町で、父金一さんと母芳子さん、3歳の弟昭造さんとの4人暮らしでした。当時5歳。1945年8月6日、幼稚園に行くため母を追って玄関先に出た時でした。閃光に襲われ気を失いました。

「金次！」。母の声に気付くと、崩れた家の下敷きでした。勤めに出る前だった父と4人ではい出し、近くの天満川へ逃げました。周りは火の海でした。

雁木という階段状の船着き場は、黒焦げになった人でいっぱい。誰かに足首をつかまれ「水を」とすがられました。「握力は弱く、足を引くとずるむけになった手の皮ことはずれる感触。忘れられない」

父が流れてきた材木を川岸に立て掛け、水に浮いていた市団をかぶせました。崩れた家、遺体や馬の死骸であふれた川につかり、布団の下で灼熱をしのぎました。

干潮で川の水位も下がるのを待ち、砂地に横たわる死体をよけながら、天満川から当時の福島川、山手川と両親に手を引かれて渡りました。「いざというときのために」と己斐駅（現西区）の裏手の山中に持っていた小さな家に身を寄せました。

大田さんを守るように熱線を浴びた母は首から下の上半身に大やけどをし、大田さんも傷に湧いたうじに苦しみました。放射線をたくさん浴びたことで、急性障害も起きました。最初に母の頭の髪が全部抜け、鏡の前で泣いていました。「気が付けば全員がそうなっていた。しかも保存していたサツマイモが底を突き、空腹で起き上がれなくなった」。深手を負った母に代わり、父と2人で懸命に食料を探し歩きましたが、万策尽きて11月ごろ、母は三原、大田さんたちは竹原の親類宅に助けを求めました。

翌年に自宅跡に戻り、原爆で焦げた廃材を父と一緒にかき集めて「黒い家」を建てました。爆心地に最も近い現在の本川小に入学。やはり「鉄道草と呼ぶ道ばたの雑草を摘んで給食のお団子に入れてもらったほど、食べ物が足りなかった」と振り返ります。

大田さんは苦学の末に旧国鉄に就職し、民営化後のJRから出向してアストラムラインの開業にも携わりました。新幹線の運行指導や、ダイヤグラムの線を引く通称「スジ屋」の仕事。「被爆体験の風化に対する危機感は持っていた。でも忙しかったし、あの光景は思い出したくない記憶。家族やわが子と話すこともなかった」

心境が変化したのは5、6年前のこと。地元の社会福祉協議会の会長として原爆死没者慰霊祭に毎年関わったことがきっかけです。

広瀬地区では、住民の多くが即死したと推定されており、大田家のように奇跡的に元の場所で暮らしを立て直した家族はわずかでした。「危機感を持つだけでなく行動し、生き残りの一人として次世代に語り継ぐべきではないか」と考え始めました。

2015年から修学旅行生らに体験を証言しています。高齢被爆者の活動が年々難しくなる現実に、「比較的若い者も頑張らなければ」と自分に言い聞かせています。「核兵器は、原爆を生き延びた人も放射線の健康被害で苦しめ続ける凶悪な兵器」と大田さん。

「広島で知ったことを親やきょうだい、友達に伝えて」。核兵器廃絶と平和への願いを若い人たちに託します。

（金崎由美）

2019年1月14日掲載

「倒壊した家や黒焦げになった人でいっぱいだった」。天満川の川岸を背に、猛火を耐えたあの日を振り返る大田さん

キーワード

急性障害

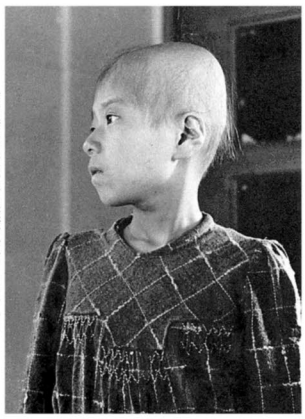
強い放射線浴びて発症

短い期間に強い放射線を一気に浴びると、急性障害が起きます。広島や長崎で原爆に遭った人たちは、直後から嘔吐や下痢、発熱、脱毛、出血、意識障害などの症状に襲われました。

大量の放射線が、血液を造る骨髄、胃や腸など消化器系の細胞を破壊することが原因です。原爆に遭った時は無傷に見えても、急に体調を崩して亡くなる人が多くいました。

1954年3月1日、米国が中部太平洋マーシャル諸島・ビキニ環礁で行った水爆実験でも、遠洋マグロ漁船の第五福竜丸が被曝し、半年後に乗組員のうち1人が亡くなりました。

原爆の影響は急性障害だけではありません。10～数十年後にがんや白内障になりやすくなることが分かってきています。後障害あるいは晩発性障害と呼ばれます。比較的少量であっても、放射能を帯びたちりなどを体に取り込めば後障害が起きやすくなるという見方もあり、研究は今も続いています。


原爆の影響で髪が抜けた少女（菊池俊吉さん撮影）

私たち10代の感想

自分にできる行動とは

大田さんが証言活動を始めたのは、被爆体験の風化に危機感を持つだけでなく、行動したいと思ったからだそうです。私は取材で被爆体験に触れて記事を書く機会が多くありますが、これで十分だと満足していないか、自分に問いました。原爆で起こったことを私からもっと若い人に伝えるため、できる行動をもっと考えたいです。（中2桂一葉）

被爆者の思い引き継ぐ

「被爆後の光景は、思い出したくない記憶」と大田さんは言います。破壊された広島の街。たくさんの死体。5歳の子どもにはつらすぎる体験です。私は春から広島を離れて大学に行きますが、周りは原爆について知らない人ばかりかもしれません。大田さんのような被爆者の思いを引き継ぐ努力は、これからが大切です。（高3池田穂乃花）

記憶を受け継ぐ

死の床で求めたモモ 今も仏壇に供える

教育熱心だった母失う

川口 弘子さん(81)
＝広島市東区

8歳の川口さん

川口（旧姓面家）弘子さん(81)は母との約束をよく覚えています。「死ぬときは親子一緒に死のう」。1945年当時、天満国民学校（現天満小）3年。戦争が激しくなり、広島から郊外の寺に姉と一緒に集団疎開しました。親から離れて暮らすのはつらいものでした。家に戻りましたが広島はいつ空襲を受けてもおかしくなかったのです。

8月6日に米軍が投下した原爆は、母と姉だけを奪っていきました。8歳の脳裏に焼き付いた体験を忘れたことはありません。

川口さんは爆心地から約1・2キロの上天満町（現広島市西区）の自宅近くで被爆しました。友達と川へ遊びに行く途中、敵機の飛行機雲を目撃。近所の軒下に入り、両手で目と耳をふさぎました。建物の下敷きになりましたが、隙間から自力ではい出しました。やけどやけがはありませんでした。

自宅の前で母静子さん（当時33歳）と再会。母が救急袋だけを持ち出し、一緒に逃げました。配給を受け取りに出掛けていた母は、自宅に戻る途中で背後から閃光を浴びました。体の後ろ全体をやけど、落ちてきた瓦で頭に大けがを負いました。治療を受けられると知って己斐国民学校（現己斐小）にも行きました。

その後、避難場所になっていた空き地で、松本工業学校（現瀬戸内高）2年だった兄敏之さん(86)と会うことができました。兄は学徒動員先に向かう途中で被爆し、自宅へ引き返しました。自宅のそばに迫っていた火の手を、防火バケツを使って消し止めたそうです。

同じ天満国民学校の6年だった姉スミエさん（当時11歳）は学校へ出掛けたまま帰ってきません。朝、姉は学校へ行くのを嫌がっていましたが、高等女学校に進学させたかった母は休ませませんでした。

川口さんは母、兄と一緒に自宅へ戻りました。周りの負傷者が郊外に避難した時も、母は「スミエが帰ってくるまで離れられない」と自宅にとどまりました。

母は寝たきりになり、やがて叔母が来て看病してくれました。母の背中のやけどはなかなか治らず、うじ虫が湧きました。母は「痛い」とも「かゆい」とも言いません。ただ「モモが食べたい」と言うので、叔母が買ってきて食べさせてくれました。息を引き取ったのは9月4日。姉に会いたい一心で生きていたのだと川口さんは思っています。

当時の自宅に近い歩道橋に立ち、体験を語る川口さん

父の利男さんは1938年、32歳の時に中国で戦死していたため、家族は兄と2人。親戚宅の納屋に置いてもらった後、叔母と叔父が育ててくれましたが、希望していた高校進学を断念します。

叔父が営む家具製造会社を手伝う傍ら、20歳から経理学校へ通い、簿記検定2級を取得しました。「楽しかった」と当時を振り返ります。22歳で結婚し、2人の子どもと5人の孫、2人のひ孫に恵まれました。しかし90年には甲状腺がんを患い、原爆症認定を受けています。

自分の被爆体験記を、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館に寄せました。厳しいけれど、優しかった母のことも触れました。教育熱心だった母は幾つも仕事を掛け持ちして朝から晩まで働き、習字やバレエの習い事もさせてくれました。

仏壇にはモモを供え、墓参りしては母と会話しています。「罪のない子どもを巻き込んでしまう戦争は絶対にいけない。子や孫、ひ孫のためにも、元気で長生きしたい」と願います。（増田咲子）

2018年9月3日掲載

キーワード

被爆体験記

祈念館に14万編の情報

1957年に刊行された「流燈」。国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の企画展で展示されている

被爆者が、原爆に遭った「あの日」の体験を書いたものですが、被災した人の救援活動に加わった人が目の前で見た惨状を書きとどめたもの、遺族や友人が原爆で亡くなった人を追悼するため記したものもあります。

元広島女学院大教授の宇吹暁さんの研究では、被爆翌年の1946年から刊行が始まり、2015年までに5895冊を確認することができました。その後も、新たに被爆体験記が出版されています。

最初の頃は、遺族や友人が亡き人に思いを伝えるため書いた手記が主流で「紙碑」とも呼ばれました。その後、被爆者運動の高まりとともに、自らの被爆体験を書いた本が増えたそうです。学校の同窓会や団体がまとめた本も多くあります。短歌や俳句で思いを表現する人も少なくありません。

平和記念公園の中にある国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、これまでに集めた14万編以上の情報を公開しています。19年1月から1年間の予定で、原爆で多くの生徒を失った市立第一高等女学校（市女、現舟入高）の追悼誌「流燈」をテーマにした企画展も開かれています。

被爆者の平均年齢はすでに82歳を超えています。原爆の悲惨さを記録に残し、次の世代に伝える努力は、これまで以上に大切になっています。

私たち10代の感想

家族への愛 どの時代も

川口さんは、母親のことを「偉大な存在」と話していました。被爆直後は、母親の死を悲しめないくらい非現実的な日常に混乱していたけれど、今では母親の墓へ行き、涙を流したり、おしゃべりしたりするそうです。どんな時代でも家族への愛情はかけがえのないものだと実感しました。私も、家族や周りの人たちに、感謝の気持ちを込めて恩返しをしたいと思いました。（中3風呂橋由里）

勉強できる環境に感謝

勉強が好きだという川口さん。母は教育ママでした。「子どもに残せるのは教育だ」と言っていたそうです。母を原爆で亡くし、高校進学を諦めなければなりませんでした。しかしその後、頑張って資格を取りました。「もっと勉強することができていたら人生は変わっていた」と言います。恵まれた環境に感謝し、悔いのないよう勉強に励みたいです。（高2池田杏奈）

記憶を受け継ぐ

迫る火 児童の命救えず

思い残す学校に地蔵。あの日の証し

加藤義典さん(90)＝広島市西区

16歳ころの加藤さん

助けられなくて、ごめんねー。加藤義典さん(90)の心の中で、ずっとこだまする言葉です。17歳で被爆した当日、段原国民学校（現段原小、広島市南区）で校舎の下敷きになった児童を必死に助けようとしましたが、猛火の中に小さな命を残すしかありませんでした。

当時は広島大工学部の前身、広島工業専門学校1年生。授業のないまま1945年7月まで呉海軍工廠へ動員されていましたが、呉空襲で焼け出され、命令で自宅のある広島市内へ。父は2年前に病死し、母は弟3人を連れ田総村（現庄原市）の実家へ疎開したので、叔父叔母と同居していました。

原爆投下の8月6日は、入学後初の授業のはずでした。爆心地から約3・4キロ離れた大洲町（現南区）の中国配電大洲製作所で、同級生と机を共にすると、やっと勉強できる日に胸が躍りました。物理の授業が始まった時、ピカッと光が突き刺さります。直後に天井が落ち、真っ暗になりました。

互いに無事を確かめ合い、外に出てはっと気付きました。青空に大きなきのこ雲。友人と京橋町（現南区）の自宅へ帰り始めると、顔が膨れ、裸のような人たちが、道にぞろぞろはい出しています。何事か聞いても分かりません。

自宅周辺は火勢が強く、近寄れません。そんな時、「下敷きになった子どもを助けてくれ」。男性に手をつかまれました。段原国民学校の先生でした。学校に着くと、つぶれた校舎の下から児童の顔が7、8人、目に入りました。真上からは火が迫っています。

子どもを引き出そうとしますが「痛いよ」。校舎に挟まれた体を痛がります。「がんばれ」。粘りました。ただ火の手は容赦ありません。最後、女の子に水を飲ませ、その場を離れました。友人と助け出せたのは1人だけ。東練兵場へ着いた時は放心状態でした。

日暮れ前、自宅へ向かおうと通り抜けた泉邸（現縮景園）も地獄のようでした。池に頭を突っ込んだ無数の遺体。水の引いた川に下り京橋の下まで来た時、叔母と再会できました。

翌7日、叔父を勤務先の広島郵便局の焼け跡で捜しましたが、手掛かりは見つけられないまま。諦めきれない叔母を説得し、母の実家へ向かうことに。8日、芸備線の玖村駅辺りまで歩いてから汽車に乗れました。

段原小に寄贈した地蔵に手をやり、体験を話す加藤さん

9月の終わり、ごそっと髪が抜け「自分も死ぬんかな」。覚悟はありました。年が明け、髪が生え始めると、生きる元気がわきました。

卒業後は中国電力に入社。27歳の時、結核を患って入院した広島赤十字病院で佐々木禎子さんと出会いました。「お兄ちゃん」と慕ってくれた少女は自分が退院した後、白血病のため亡くなりました。

段原国民学校で命を落とした子どものことも伝えなければと思い、筆をとり、記憶を絵に残しました。

被爆30年ごろから、8月6日になると人知れず段原小へ祈りに行くようになりました。自らの体験を明かす手紙を同小に送り、児童へ証言するようになったのが被爆から半世紀。救えなかった子どもたちが亡くなった場所に地蔵を贈り、あの日の証しにしました。

証言活動も老いには勝てず、今年を最後にしましたが「今の子どもがさらに伝えてくれれば、あの子たちも喜んでくれる」。命がはかなく消えていく時代が二度と来ないよう、手を合わせます。

（山本祐司）

2018年10月1日掲載、9ページに英語訳

キーワード

国民学校

勉強より「戦争に勝つため」

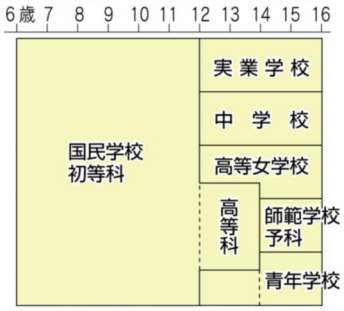
今の小学校に当たる学校は戦時中、「国民学校初等科」と呼ばれていました。1941年の「国民学校令」で制度が変更されました。尋常小学校（6年間）は国民学校初等科（同）に、高等小学校（2、3年間）は国民学校高等科（2年間）になりました。

国民学校令は、軍国主義教育の色合いが濃いものでした。国と天皇に仕える「少国民」として身をささげることを求められ、空襲に備えた防空演習や、心身の鍛錬と団体訓練が勉強よりも優先されました。すべては戦争に勝つためだと言われました。

子どもたちは、国民学校初等科で6年間学んだ後、国民学校高等科や中等学校（中学校、高等女学校、実業学校）などに進みましたが、進学できる人は限られました。

終戦から2年後の47年に教育基本法、学校教育法ができて、今と同じ小学校（6年間）、中学校（3年間）になりました。

戦時中（1944年）の10代前半までの主な学校制度



※実業学校、中学校、高等女学校は中等学校

私たち10代の感想

戦争 何度も心苦しめる

加藤さんが自分だったらと考えると、何度も苦しむでしょう。1度目は学徒動員で勉強できなかった時。「ラッキー」かもしれませんが、勉強しようと思って進学したのだから、つらいと思います。2度目は子どもを助けられなかった時。特に女の子を諦めて逃げなくてはいけなかったのは、後々まで悩みます。人の心を何度も何度も苦しめる。それが戦争です。

（高1伊藤淳仁）

核の危険 人ごとでない

加藤さんは、若者に核兵器や原爆の問題に対してもっと関心を持ってほしいと強調しました。それは10代で被爆し、「あの日」のすさまじい記憶が鮮明に残っている加藤さんだからこそ、最近の核兵器を取り巻く状況を危険だと感じられるのだと思います。僕も人ごとではないと気付きました。自分の子や孫のためにできることを、考えないといけません。

（高3岩田央）

Survivors' Stories

I Was Unable to Save the Lives of Children

Yoshinori Kato, 90, Hiroshima

"I'm sorry I was unable to save you." These words keep on running through my mind. I was 17 when Hiroshima was attacked with the **atomic bomb**. I tried hard to **rescue** children who were under the destroyed building of the Danbara National School (now Danbara Elementary School located in Minami Ward). However, I had to leave the children behind and run away because the fire was coming closer and closer.

survivors' 生存者の
was unable to できなかった
atomic bomb 原爆
rescue 救出する

Back then, I was a first-year student at **the Hiroshima Technical Institute** (now Hiroshima University). The classes at school stopped because of the war. **Instead of** studying in classes, students in my school were sent to work at **the Kure Naval Arsenal** until July 1945. Because of **air raids** on the city of Kure, I was ordered to return to my home in Hiroshima. My father had died of an illness two years before and, in order to live in a safer place, my mother and three brothers had moved to her parents' house in the village of Tabusa (now Shobara city) in the northern part of Hiroshima Prefecture. I was living in Hiroshima with my aunt and uncle.

the Hiroshima Technical Institute 広島工業専門学校
instead of ～の代わりに
the Kure Naval Arsenal 呉海軍工廠（こうしょう）
air raids 空襲

On August 6, I was going to take the first class in my school. We couldn't use our school building then, so we went to **the Ozu Factory of Chugoku Haiden** (now **the Chugoku Electric Power Company**), which was located about 3.4 kilometers from the **hypocenter**. When I sat at my desk in the **temporary** classroom with my friends, I was excited about finally starting to study in classes. When the **physics** class began, a **flash** of light **suddenly** came into the room. Right after the flash, the **ceiling** fell down on us and I couldn't see anything in the darkness.

the Ozu Factory of Chugoku Haiden 中国配電大洲製作所
the Chugoku Electric Power Company 中国電力
hypocenter 爆心地
temporary 一時的な・仮の
physics 物理
flash 閃光（せんこう）
suddenly 急に
ceiling 天井

We made sure that everyone was all right, Then we went out of the building and were surprised to see a **huge mushroom cloud** rising in the blue sky. I began walking with my friends toward my house in the Kyobashi-cho (now a part of Minami Ward). We **came across** many survivors whose faces **were swollen** and who **were nearly naked**. I asked them what had happened, but no one knew the answer.

huge mushroom cloud 巨大なきのこ雲
came across 出くわした
were swollen 腫れあがっていた、膨れていた
were nearly naked ほとんど裸だった

The fire was so big around my house that I couldn't go close to it. Suddenly, a man held me by the hand. He was a teacher from Danbara National School. He asked me and my friends to rescue children from under the destroyed school building. When we reached the school, we saw seven or eight children's faces under the **debris** of the school building. **Flames were approaching** from above.

debris がれき
flames 炎
were approaching 近づいてきていた

We tried to pull the children out, but they cried out **in pain** because their bodies were caught in the heavy debris. I told them to **hold on**. We tried hard to help them get out, but the fire came closer and closer to us. In the end, I gave some water to a girl and had to leave the children in the fire. We were able to save only one child of all those children. When I arrived at **the East Drill Ground**, I was **in a state of shock**.

in pain 痛がって
hold on 持ちこたえる・がんばる
the East Drill Ground 東練兵場
in a state of shock 放心状態で

Before **dusk**, I started walking toward my house and went through a garden called Sentei (now known as Shukkeien Garden). I felt **as if** I were in **hell**. I saw so many **dead bodies** with their heads in the pond. I went down to the riverside when **the tide was out** and walked down along the river. At Kyobashi Bridge, I came across my aunt.

dusk 日暮れ
as if まるで～かのように
hell 地獄
dead bodies 死体
the tide was out 潮が引いていた

The next day, I went to the Hiroshima Post Office, where my uncle worked, but was unable to find him or get any idea where he was among the burnt **ruins** of the building. My aunt wanted to keep on searching for him, but I **persuaded** her to go to my grandparents' house, where my mother was. We walked to Kumura Station on the Geibi Line, and were finally able to take a train on August 8.

ruins 廃虚
persuaded 説得した

Around the end of September, all of my hair fell out and I thought that I might also die soon. I accepted this fact, but my hair began to grow again at the beginning of **the following year**. I felt **energy** to go on living again.

the following year 翌年
energy 気力・元気

After graduating from school, I got a job at the Chugoku Electric Power Company. At the age of 27, I suffered from **tuberculosis** and **was hospitalized** in the Hiroshima Red Cross Hospital, where I met Sadako Sasaki. We became friends and she called me "Big Brother." After I left the hospital, Sadako died of **leukemia**.

tuberculosis 結核
was hospitalized 入院した
leukemia 白血病

I thought I should tell people about the students **buried alive** and killed in the fire at Danbara National School, so I drew pictures of them, from what I remembered. Around 30 years after the atomic bombing, I began visiting the elementary school to **pray for** them on August 6, though I did not tell anyone about it. Half a century after the bombing, I sent a letter about my experience to the school and then started sharing my story with the **pupils** there. To remember the **victims**, I **donated** a **statue** of "Jizo," a god who protects children, and **had it put up** at the place where I could not save those children's lives.

buried alive 生き埋めになった
pray for ～のために祈る
pupils 児童
victims 犠牲者
donated 寄贈した
statue 彫像
had it put up それを立ててもらった

I decided to stop telling the students in the elementary school about my experience because of my old age. I visited the school for the last time this year. However, I believe that if children tell my story to the next **generations** and create peace, those children, the victims, will be pleased. I put my hands together and pray for a world where no more lives will be lost in that way.

generations 世代

記憶を受け継ぐ

強烈な光 体中にガラス

家は焼け、父も母も姉も白骨になっていた

河内 政子さん(89)
＝広島市東区

15歳の河内さん

「平和を信じ、無念の思いで亡くなった人たちの死を無駄にせず、次世代につなぎたい」。河内（旧姓友竹）政子さんは89歳になった今も、被爆体験を語っています。

当時、広島市立第一高女（現舟入高）4年の16歳でした。自宅は爆心地から約400メートルの塚本町（現広島市中区）にあり、父軍一さん（当時48歳）が繊維製品などの卸問屋を営んでいました。8月6日は学徒動員先の工場が休みで、前日夜から、爆心地から約2・1キロ離れた牛田町（現東区）の祖母宅へ行っていました。「空襲があったら一家全滅してしまう」と、両親に強く勧められたからです。

朝、久しぶりの休みがうれしくて庭へ出て散歩し、玄関へ入った瞬間でした。「ピカッ」と強烈な光を感じたのと同時に、崩れた家が覆いかぶさり、下敷きになりました。意識が戻った後、わずかな隙間からの明かりを頼りに脱出。体のあちこちにガラスが刺さっていました。庭にあった防空壕へ飛び込むと、血だらけの祖母がいました。2人で近くの山の方へ逃げることにしました。

「どうか生きていてほしい」。広島の街が焼けるのを見ながら、家族の無事を必死で祈り、夜を明かしました。7日、8日と、わが家へ向かおうとしましたが、死体がいっぱいで途中までしか進めませんでした。

ようやくたどり着いたのは9日でした。家は焼け、父は玄関の跡で、姉信子さん（当時18歳）は台所で座ったまま白骨になっていました。母マサノさん（当時46歳）は炊事場に横たわっていました。上半身は黒く焦げ、下半身は白骨になり、足の骨の上に包丁が乗っていました。その様子から、即死だったと思っています。

体が震え、その場にしゃがみ込んでしまいました。3人の骨を拾って防空頭巾に入れ、胸に抱きしめて自らの死に場所を探して歩き回りました。川に入ろうにも、雁木に死体が折り重なっていて、下りることができませんでした。「祖母が心配している」と思い直し、祖母の元へ戻りました。

その後、母方の親戚が来て、母の実家がある亀山村（現安佐北区）まで大八車で連れて帰ってくれました。それから髪は抜け、体中に黒い斑点ができました。高熱と下痢に苦しみ、意識がもうろうとする日々が続きました。2カ月たった頃から回復に向かいました。

両親と姉が亡くなっていた自宅跡付近で当時を振り返る河内さん

戦後は小学校の教員になり、60歳で結婚し、2人の子と4人の孫にも恵まれました。「子どもたちが戦争ごっこを楽しんでいるのを目にしてから、思い出すのもつらかった被爆体験を話すようになった」と教員時代を振り返ります。

被爆70年の広島市の平和記念式典で市長が読み上げた平和宣言には、河内さんが寄せた文章が生かされました。「家族、友人、隣人などの和を膨らませ、大きな和に育てていくことが世界平和につながる。思いやり、やさしさ、連帯。理屈ではなく体で感じなければならない」

その言葉通り、証言活動では今も脳裏に焼き付いた原爆の記憶とともに、いじめやけんかをせず、思いやりの心を大切にするなど日常生活で平和を築く大切さも伝えています。これからも一回でも多く、証言を重ねるつもりです。

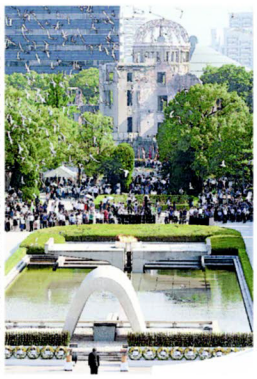
（増田咲子）

2018年6月4日掲載、11ページに英語訳

キーワード

平和記念式典

原爆死没者名簿納める


平和記念式典で、原爆犠牲者の慰霊と平和を願い放たれたハト（2018年）

原爆が落とされた8月6日午前8時15分に合わせて、平和記念公園で毎年開かれています。原爆で亡くなった人たちを追悼し、世界平和の実現を祈ることが目的です。

被爆翌年の1946年8月5日に「平和復興市民大会」という名前で行事があり、翌年の47年8月6日には「平和祭」が開かれました。50年は朝鮮戦争のあおりで中止させられましたが、その後は毎年続いています。

平和記念式典では、広島市長が「平和宣言」を読み上げたり、それまでの1年間に亡くなるか死亡が確認された人、遺族から申し出があった人の名前を「原爆死没者名簿」に書き記して原爆慰霊碑に納めたりします。

午前8時15分に、遺族代表とこども代表が突く「平和の鐘」を合図に全員で黙とうします。広島市内の小学生が平和をテーマにした作文を発表する「こどもピースサミット」で大賞に選ばれた2人が、「平和への誓い」を読み上げます。

2018年の平和記念式典で、原爆死没者名簿は115冊、計31万4118人分に上りました。遺族に加えて、米国を含む85カ国と欧州連合（EU）の代表をはじめ、国内外から約5万人が参列しました。

私たち10代の感想

家族や友達 大切にする

「家族や友達を大切にすることが平和につながる」という言葉が印象に残りました。身近で支えてくれる人に感謝の気持ちを伝え、今まで以上に大切にしたいと思いました。また、「今の10代は勉強ができるので幸せだ」と繰り返していました。憧れて入った学校では工場に動員されて勉強ができなかったそうです。恵まれた環境をありがたく思いながら勉強を頑張りたいです。（中3森本柚衣）

原爆許せない 思い新た

当時の自宅近くの相生橋周辺へ行くと、ローラースケートで遊んだ記憶と、家族の骨を見つけて自分も死のうと川べりへ行った時の光景がよみがえるそうです。川には死体がいっぱいあり、今思い出しても胸が痛くなるそうです。幼い頃、遊んだ場所には楽しい思い出があるはずなのに、悲しい記憶を同時に呼び覚ます原爆をあらためて許せなくなりました。（高2藤井志穂）

Survivors' Stories

Finding My Family's Skeletons in My Burnt House

Masako Kochi, 89, Higashi Ward, Hiroshima

I'm 89 years old now, but I still share my experience of the atomic bombing. I **believe in** peace. I will never **waste** the lives of those who **regrettably** died and I want to continue to share my experience with the next **generation**.

At the time of the **atomic bombing**, I was 16 and a fourth-year student at **Hiroshima First Municipal Girls' High School** (now Funairi High School). My house was in Tsukamoto-cho (now part of Naka Ward). My father, Gun-ichi, 48, ran a **wholesale store** of **textile products**. Because the factory where I was sent to work was closed on August 6, I went to my grandmother's house in the Ushita district (now in Higashi Ward), 2.1 kilometers from the **hypocenter**, the night before. My parents had asked me to stay with my grandmother, saying, "If there's an **air raid**, the whole family might be killed."

August 6 was my first day off from work in a long time, so I was happy and walked around my grandmother's garden. The moment I entered the house again, I felt a strong **flash** and the destroyed building fell down on me. When I came to, I saw a light through the **debris** and **managed to** escape, following the light. I found many pieces of broken glass **stuck** into my body. When I ran into the **bomb shelter** in the garden, I saw my grandmother covered with blood. We decided to escape to the mountains together.

"Please **stay alive**!" I **prayed** for the **safety** of my family all night, seeing the city center of Hiroshima burning in the fire. I tried to go home the next day, and the day after that, but I couldn't because the streets were covered with **dead bodies**.

Finally, on August 9, I managed to reach my house and found that it had been **completely** destroyed by fire. I found my father's skeleton at the **entrance** and my 18-year-old sister's skeleton in the kitchen. My sister, Nobuko, had been sitting in the kitchen. My mother, Masano, 46, was lying on the floor of the kitchen; the **upper half of her body** was burnt black and the lower half was now only **bones**. There was a kitchen knife on the bones of her foot. **Judging from the situation**, I think that they **were killed instantly**.

After seeing them, my body **was shaking** and **my legs failed me**. **After a while**, I picked up my family's bones and put them in my **air-raid hood**. Then I **wandered around** with the bones in my arms, wondering where I should die. I thought of dying in the river, but there were **piles of** dead bodies on the **stone steps** of the **riverbank**, so I was unable to go down them. At that time, I remembered that my grandmother was worrying about me, and I went back to my grandmother's house.

Later, my mother's relatives came and carried me in a **two-wheeled cart** to the village of Kameyama (now part of Asakita Ward), where my mother's parents lived. I lost my hair, had black **spots** all over my body, and **suffered from** high fever and **diarrhea**. I often lost **consciousness**. Two months passed and I began to **recover** to better health.

After the war, I became an elementary school teacher and worked until I **retired** at the age of 60. I got married when I was 24 and had two children and four grandchildren. When I was a teacher, I began to share my experience of the atomic bombing. When I saw children **playing at war**, I decided to talk about my experience of the atomic bombing, even though I didn't want to remember those **painful** memories.

The Peace Declaration read out by the **mayor** of Hiroshima on the 70th **anniversary** of the atomic bombing **included** my words: "Creating **harmony** with our family, friends and neighbors and developing this harmony with more and more people will lead to world peace. **Consideration**, kindness, **cooperation**—these are not just ideas for us to understand. We have to feel them in our hearts."

I believe in these words, and when I share my experience of the atomic bombing, which **is still imprinted on my mind**, I always **stress** the importance of building peace through consideration for others in our everyday lives and living without **bullying** or fighting. I hope to continue talking about my experience **in public as long as I can**.

skeletons 骸骨
believe in　～の良さを強く信じている
waste　無駄にする
regrettably　遺憾ながら
generation　世代

atomic bombing　原爆投下
Hiroshima First Municipal Girls' High School 広島市立第一高女
wholesale store 卸問屋
textile products　繊維製品
hypocenter　爆心地
air raid　空襲

flash　閃光（せんこう）
debris　がれき
managed to　何とかして～した
stuck　刺さっていた　（stick「刺す」の過去分詞）
bomb shelter　防空壕（ごう）

stay alive　生きながらえる
prayed　祈った
safety　安全・無事
dead bodies　死体

completely　完全に
entrance　玄関・入り口
upper half of her body　上半身
bones　骨
judging from the situation　状況から判断して
were killed instantly　即死だった

was shaking　震えていた
my legs failed me　足に力が入らなかった
after a while しばらくして
air-raid hood　防空頭巾
wandered around　さまよい歩いた
piles of　～の積み重なった山
stone steps　石段
riverbank　川岸

two-wheeled cart　大八車
spots　斑点
suffered from　～で苦しんだ
diarrhea　下痢
consciousness　意識
recover　回復する

retired　退職した
playing at war　戦争ごっこをしている
painful　苦しい・つらい

The Peace Declaration 平和宣言
read out　読み上げられた
mayor　市長
anniversary　年忌・記念日
included　～を含んでいた
harmony　調和
consideration　思いやり
cooperation　協力

is still imprinted on my mind　今も脳裏に焼き付いている
stress　～を強調する
bullying　いじめ
in public 人前で
as long as I can　できるだけ長い間

被爆樹木・被爆建物は語る

原爆の惨禍を経験したのは、人間だけではありません。被爆時から立っていた木や建物が、今も広島市内に残っています。「被爆樹木」「被爆建物」といいます。被爆樹木は爆心地から半径約２㌔以内に立つ160本、被爆建物は半径５㌔以内の85カ所を広島市が登録しています。街角でひっそりと「あの日」を語り続けています。

❶ 天満小のプラタナス

爆心地から約1.2㌔の天満小（西区）は、原爆で校舎が全壊し、児童と教職員の計293人が亡くなりました。校内にあったプラタナスも幹に大きな傷を負いました。戦後校庭へ植え替えられた４本は、大きな空洞を残すなど傷痕を隠せません。今は同校のシンボルとして親しまれ、児童を見守り続けています。

❷ 本川沿いのシダレヤナギ

今も残る中で爆心地に最も近い被爆樹木が、市青少年センター（中区）西側のシダレヤナギです。その距離は約370㍍。原爆の投下目標となった相生橋の北側、本川沿いにたたずんでいます。被爆して幹が倒れましたが、戦後根元から芽が吹き出し再び成長しました。台風に遭っても耐え、根が腐っても治療を受けて生き永らえています。

❸ 基町のクスノキ

周囲の市営基町アパート（中区）に負けないほど空へ向かって伸びているのは、クスノキです。被爆樹木の中で最も背が高く、約30㍍あります。幹回りも約５㍍あり、樹齢は約200年とみられます。この木は約1.1㌔南へ離れた爆心地の方向へやや傾いています。爆心地側の表面が焼け、反対側に比べ成長が遅くなったためと考えられています。

被爆樹木・被爆建物マップ

鶴見橋東側でジュニアライターに原爆の恐ろしさを話す北川さん（左端）。後ろの被爆シダレヤナギは再生し、葉を茂らせています

鶴見橋のシダレヤナギ

火の手に阻まれ 泳ぎ着いた先に…

爆心地から約1.7㌔離れた鶴見橋の東詰め（南区）に立つシダレヤナギに、「よく生き残ったな」と声を掛ける被爆者がいます。今も証言活動に励む広島大名誉教授の北川建次さん（84）＝佐伯区＝です。猛火から逃れる途中、この木の下で体を休めた記憶をジュニアライターに話してくれました。

10歳だった竹屋国民学校（現竹屋小）５年の時、爆心地から約1.2㌔の教室の中で被爆しました。倒れた校舎からはい出して下流川町（現中区）の自宅へ帰ろうとしましたが、火の手に阻まれ、東へ。鶴見橋に着くと、橋は折れ、落ちていました。

逃げないと―。必死に泳いで京橋川を渡り、対岸のシダレヤナギのたもとに倒れ込みました。爆風で太い幹は折れ枝も散乱…。気付けば川面を人が流されています。助けを求める声に何もできず「阿鼻叫喚（あびきょうかん）だった」と振り返ります。その場にいられず、腰を上げ、さらに東の比治山へ向かいました。

そのシダレヤナギは一度枯れましたが、株から新しい芽が伸び再生しました。「街が復興しても心の傷は変わらない。被爆樹木が存在するだけでも核兵器の恐ろしさは伝えることができる」と北川さんは話します。

❹ 広島城のユーカリ

広島城（中区）の天守閣は原爆で倒壊しましたが、城内にあった木は５本が残っています。爆心地から約740㍍の二の丸跡にあるユーカリは火災に強く、戦後も枝を茂らせました。台風で幹が折れても復活し、その強い生命力は中沢啓治さんの漫画「ユーカリの木の下で」で描かれました。

❺ 平和大通り緑地帯

エノキやムクノキなど12本が残るエリアが街中にあります。爆心地から約530㍍離れた中区の平和大通りの緑地帯です。一帯はかつて国泰寺の境内でしたが、原爆で壊滅。それでも木々は根元から芽を吹き出すなどして復活しました。クロガネモチやセンダンのほか、秋に実を付けるカキも育ち緑が茂ります。

Ⓐ 中国軍管区司令部跡

「広島が全滅」。原爆投下の第１報は、広島城（中区）にあった中国軍管区司令部の防空作戦室から女学生が出しました。2017年に86歳で亡くなった岡ヨシエさんはその一人。比治山高女３年で、ここに学徒動員されていました。爆心地から約790㍍。司令部はほとんど壊滅しました。

Ⓑ 旧広島陸軍被服支廠

旧広島陸軍被服支廠（南区）は市内最大級の被爆建物です。爆心地から約2.7㌔離れた一角に、２階建ての倉庫が並んでいます。1913年に完成し、被爆直後は臨時の救護所として女学生ら多くの被爆者を収容しました。西側の窓枠にはまった鉄扉は原爆の爆風で曲がった跡が今でもはっきりと分かります。

Ⓒ 広島大旧理学部１号館

広島大旧理学部１号館（中区）は前身の広島文理科大の本館として1931年に建てられ、当時はモダンなデザインでした。爆心地から約1.4㌔にあり、原爆で全焼。教員や学生が被爆しました。長年キャンパスのシンボルとして親しまれましたが91年に閉鎖され、市が活用策を考えています。

Ⓓ 旧日本銀行広島支店

爆心地から約380㍍の旧日本銀行広島支店（中区）は、原爆の爆風で窓枠や欄干が吹き飛びましたが、２日後に支払い業務を再開。１階の窓口を被災した市内の銀行の仮営業所として割り当て、市民の生活を支えました。1992年に支店は別の場所に移りましたが、建物は保存され市の重要文化財になりました。

Q どうして原爆が投下されたの？　A 米の狙い巡って論争続く

核兵器は、人類の歴史で最悪の大量破壊兵器だといわれます。1945年７月16日、米国はニューメキシコ州アラモゴード近郊のトリニティ・サイトで核実験を行いました。その３週間後に広島にウラン型原爆を、さらに３日後には長崎にプルトニウム型原爆を落としました。材料の異なる原爆が使われました。

もともと米国は、ヒトラーのナチスが政権を握ったドイツに先を越されまいと原爆開発を始めましたが、後に日本との戦争で使う方針に変更しました。

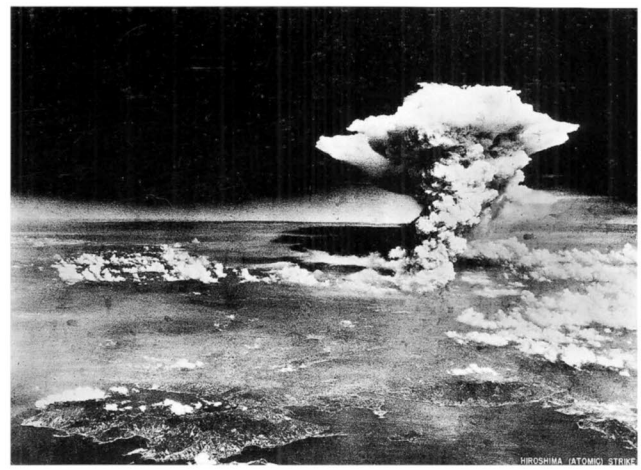
第２次世界大戦も終盤の45年になると、米軍は日本の主な都市を爆撃機で攻撃しますが、原爆投下の準備も着々と進めました。広島と小倉（現在の北九州市）、新潟、長崎を投下目標に選び、その中から広島を第１目標に決めました。原爆の破壊力を調べるため広島への空爆を控えました。

45年８月６日午前８時15分、北太平洋のテニアン島を出撃したＢ29爆撃機「エノラ・ゲイ」が、丁字形の相生橋を目標に原爆「リトルボーイ」を投下。島病院（現在の島内科医院、広島市中区）の約600㍍上空でさく裂しました。

広島は明治時代から軍都で、現在の広島港から海外に陸軍の軍隊を送る拠点として、軍に関係する施設の拡充が続きました。ただ市街地は民家や商店が中心であり、市民が無差別に犠牲になりました。

米国では「降伏しない日本との戦争を終わらせるため原爆を必要とした」とよく言われます。一方で、戦争後はライバルになると思われた当時のソ連に強大な原爆を見せつける狙いがあったといいます。多額のお金で原爆を開発したため、投下せずに終われば米国民の理解を得られない、との考えもあったと指摘されています。

長崎については、最初は小倉が第１目標でした。しかし小倉上空の視界が悪かったため、Ｂ29爆撃機「ボックスカー」は８月９日午前11時２分、長崎の浦上地区に原爆「ファットマン」を落としたのでした。



広島に投下された原爆のきのこ雲（米軍撮影、原爆資料館提供）

Q 原爆でどんな被害が出たの？　A 死者は年末までに14万人

原爆の特徴は、高温の熱線、猛烈な爆風、そして放射線です。広島の爆心地の地表温度は３千～４千度になり、熱線と爆風で爆心地から半径２㌔以内の建物がおおよそ焼け落ちました。23㌻にある地図を見ると、全焼した区域がよく分かります。

人口が約35万人だったとみられる広島市では、1945年末までに14万人が犠牲になったと推定されています。この数字は「プラスマイナス１万人の誤差がある」と言われます。当時の混乱と、その後の調査も十分とはいえなかった実態を物語ります。

人口が約24万人だった長崎市は、被爆５年後の調査で「45年末までに７万3884人が原爆で死亡」と推定され、その数字から「死者約７万人」とされています。広島で被爆した後長崎に移動し、再び原爆に遭った人もおり、「二重被爆者」と呼ばれます。

Q 広島はどう復興したの？　A 市民の努力と海外からの支援

一面が焼け野原となった広島と長崎では、何とか生き延びた市民が、街の機能を取り戻すため自らの負傷を押して働きました。広島電鉄は大打撃を受けましたが、早くも３日後に一部の線路に一番電車が走りました。

海外からの支援も受けました。赤十字国際委員会の駐日代表を務めたスイス人医師のマルセル・ジュノー氏は「広島の恩人」と呼ばれています。原爆投下から約１カ月後、広島に入り、第２次世界大戦後に日本を占領した連合国軍総司令部（ＧＨＱ）を説き伏せて15㌧もの医薬品を届けました。まだ日本になかった抗生物質などの薬が、負傷者を助けました。

戦後すぐの時期は深刻な食糧難に陥り、人々は闇市で物を買い求めました。そんな広島に1940年代後半から50年代にかけて、米国の慈善団体などが大量の救援物資を届けてくれました。ハワイやカリフォルニア州に住む広島県出身の移民も、寄付金を集めてくれました。

広島では２千人以上ともいわれる子どもが親を失い、原爆孤児になりました。米国人ジャーナリストのノーマン・カズンズ氏たちが力を注いだのが「精神養子運動」です。米国市民が毎月送金し、孤児の生活や学業を支援しました。

広島を訪問した精神養子運動の提唱者、米国人カズンズさん＝中央（1951年1月）

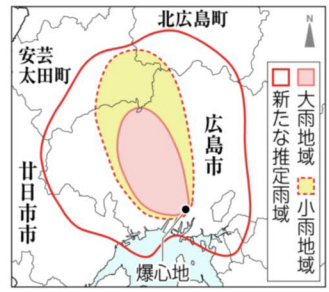
Q「黒い雨」って何？　A 放射性物質やすすを含む雨

原爆投下直後、放射性物質や大火災によるすすを含んだ黒い雨が降りました。爆発と大火災による上昇気流により、雨雲ができたためです。

降り始めた時期は地域によって異なりますが、早くは爆発の20～30分後ごろから広島市の北西部で降りました。被爆後の調査では、爆心地から北西方向の長さ約29㌔、幅約15㌔の卵形のエリアだとされました。

国はこの調査を基に1976年、特に「大雨」だったという長さ約19㌔、幅11㌔の地域を「第１種健康診断特例区域」に指定しました。そこで雨を浴びた人は無料で健康診断が受けられるほか、指定された病気になれば、被爆者健康手帳を取得できます。しかし、その周囲の「小雨」とされた地域やさらに広い地域は対象外です。

広島市や広島県による2008年度からの調査で、推定雨域は「大雨」地域より約６倍広く、体験者が健康不安を抱えていることが分かりました。市や県は、全ての降雨地域を特例区域に指定するよう要望しましたが、国に認められていません。裁判を起こして区域拡大を求めている住民もいます。



Q 被爆者とは？

A 入市、救護、胎児で被爆も

広島と長崎で原爆に遭った人を「被爆者」といいます。

被爆者援護法に基づき、「被爆者健康手帳」を交付された人たちは、厚生労働省によると2018年３月末現在で計15万4859人です。被爆時に当時の広島、長崎両市内や周囲の一定区域にいて直接被爆した▽原爆が落とされて２週間以内に爆心地から２キロ圏で入市被爆した▽市内には入らなかったが、２週間以内に負傷者を救護所で看病するなどした▽胎児の時お母さんのおなかの中で被爆した―のいずれかに当てはまる人です。

一方で、差別や偏見を恐れて手帳交付を申請してこなかった人もいます。

海外に住む被爆者もいます。18年３月末現在、32カ国・地域に3123人。在外被爆者と呼ばれます。

朝鮮半島の出身者やその子で、終戦により日本の植民地支配が終わると韓国に戻った人が多くいます。強制的に広島に連れてこられて働かされていた人も含まれます。北朝鮮に渡った被爆者については、現在の人数や健康状態などの正確な情報がありません。

米国には、広島からの移民の２世で日本に戻っていて被爆した人や、戦後に結婚などで渡米した人が暮らしています。ブラジルには戦後移民の被爆者が少なくありません。

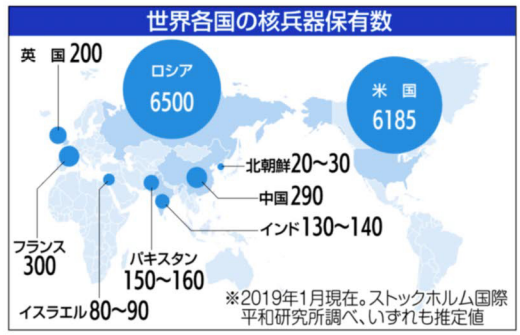
Q 核兵器はどれだけあるの？

A ９ヵ国が１万4000発近く保有

世界には米国、ロシア、英国、フランス、中国、イスラエル、インド、パキスタン、そして北朝鮮の９カ国の核兵器が約１万3865発あるとみられています。その９割以上が米国とロシアのもので、地球を何度も滅亡させることができる数だといわれます。

1945年に米国が広島・長崎に原爆を投下した後、旧ソ連（現在のロシア）と米国の間の「冷戦」と呼ばれる対立の中で、核兵器の開発・製造が競われました。80年代には約７万発に達しました。

核兵器開発には、試しに使う「核実験」が必要とされるため、これまで約2060回も行われています。核実験場の周りに住む住民が健康被害を訴えているほか、地球環境にも大きな影響を与えています。



Q 核兵器禁止条約って？

A 威嚇も違法化。参加国数が課題

核兵器を持つ国同士が対立すると、核兵器が使われる危険は高くなります。想定外のミスや盗難でも、核兵器が発射されたら大変な事態になります。しかし核兵器を持つ９カ国は、保有数をゼロにしようとしません。「わが国は強大な兵器を持っているぞ」と誇っている状態です。

そのことにいらだちを募らせた122カ国・地域の賛成で、2017年７月７日、米国ニューヨークの国連本部で「核兵器禁止条約」が成立しました。核兵器廃絶を前に進めるための条約です。

核兵器の何を、どう禁止しようとしているのでしょうか。新たに核兵器を持つことはもちろん、他国への譲り渡しや核兵器開発の援助も禁止です。「核兵器を使うかもしれないぞ」と脅す「威嚇」も違法です。

2017年のノーベル平和賞の授賞式。中央が被爆者のサーローさん

核兵器禁止条約の実現を熱心に訴えた非政府組織（NGO）の「核兵器廃絶国際キャンペーン」（ICAN）は、その年にノーベル平和賞を受賞。広島で被爆し、現在はカナダに住むサーロー節子さん(87)が代表して賞状を受け取りました。

課題もあります。この条約は加盟国が50カ国に達したら発効することになっていますが、条約賛成でも加盟手続きをまだ終えていない国が多くあります。

肝心の９カ国は、条約に参加しそうにありません。実は日本政府も、「核兵器でわが国を守って」と米国に求める政策を堅持しているため、条約に背を向けています。被爆者から強く批判されています。

Q 広島に来る外国人なぜ増えた？

A 政治家や著名人の訪問で注目

広島の原爆資料館によると2018年度の入館者数は152万2453人です。18年７月の西日本豪雨の影響があり前年度より１割近く減りました。しかし外国人は43万4838人で、６年連続で過去最多を更新しました。原爆被害を学ぶ場への関心が高まっています。

今年４月25日には、改修工事をしていた本館が２年ぶりに再オープンしました。さらに多くの観光客が海外から訪れそうです。

各国の政治家や著名人の広島訪問も絶えません。16年５月27日には米国のオバマ大統領が、原爆投下国の現職の大統領として初めて被爆地を訪れました。

2016年に広島を訪れて演説するオバマ米大統領（当時）

広島、長崎両市は国内外の7700以上の都市が加盟する平和首長会議などを通じて、世界中に被爆地訪問を促しています。特に核保有国の政策を担当する人たちに来て学んでもらうことは、核兵器なき世界を実現する上で欠かせません。

古くは、1981年にローマ法王ヨハネ・パウロ２世が平和記念公園で「平和アピール」を読み上げ「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命を破壊します」と語りました。今年11月、ローマ法王フランシスコが広島と長崎を訪れることが有力視されています。

平和記念公園を歩く

平和記念公園（広島市中区）の周辺には、原爆資料館と原爆ドームのほかにも、被爆時にその場所がどうなったかを伝える説明板や、犠牲者の慰霊碑がたくさんあります。建物疎開作業中に犠牲になった子どもたちを追悼する碑は、実際に生徒たちが作業をしていた場所の近くに建てられています。

原爆資料館で、犠牲になった子どもたちの遺品などを見学してみましょう。そして、平和記念公園とその周りをゆっくり歩き、慰霊碑なども巡ってみましょう。

❶原爆資料館　本館一新 実物にこだわり

原爆資料館の本館は、4月にリニューアルオープンしました。1955年の開館以来3回目だった今回の改装では、亡くなった子どもたちの遺品などの「実物」の展示を充実させました。大切な命を奪う原爆の残酷さを来館者の心に訴えています。

ボロボロに引き裂かれた制服や、焼け焦げた学生帽―。本館入り口の「8月6日の惨状」コーナーでは、あの日、市内で建物疎開作業に当たっていた中高生の遺品が展示されています。火の海を逃げ惑い苦しみながら亡くなった子どもたちは皆さんと同世代です。

熱線や爆風で折れ曲がった鉄骨や、溶けた金属の塊も置かれ、原爆がもたらす悲惨さを無言で語っています。負傷者であふれる救護所の写真や、被爆者が壮絶な光景を描いた「市民が描いた原爆の絵」が並びます。

「魂の叫び」コーナーは犠牲者一人一人と向き合う空間です。「あつい」「お水ちょうだい」。ガラスケースに収められた遺品のそばには、犠牲者や遺族の言葉が添えられています。

広島二中（現観音高）1年だった折免滋さんの弁当箱には、黒焦げになったご飯や油炒めが残ったまま。あの朝、滋さんはお弁当を楽しみに出かけましたが、口にすることはありませんでした。自分のきょうだいや友達に同じことが起こったら…。立ち止まって、想像してみてください。

本館をじっくり見学した後は東館で、原爆が開発された歴史、被爆後の復興、世界の核情勢などを学びます。朝鮮半島出身者や東南アジアからの留学生など、外国人被爆者を伝えるコーナーも新たにできました。

「8月6日の惨状」コーナー。建物疎開作業に出ていた子どもたちがたくさん亡くなりました

一人一人の遺品と向き合い、失われた命の尊さを考える「魂の叫び」コーナー

「市民が描いた原爆の絵」や負傷者の写真が被爆直後の惨状を伝えています

「広島の家」被爆者支える

原爆資料館付属展示施設 シュモーハウス

米国の平和活動家フロイド・シュモーさん（1895～2001年）を知っていますか。1949年8月に広島市を訪れ、仲間と一緒に、原爆で家を失った人びとのための住宅「広島の家」を建てた人です。

シュモーさんたちが建てた計15棟（21戸）の「広島の家」のうち、現在は、中区江波二本松に1軒だけ残っています。原爆資料館の付属展示施設「シュモーハウス」として一般公開されており、当時使われたハンマーや設計図、活動に参加した人の寄せ書きが展示されています。

シュモーさんの足跡を学ぶことで、広島の復興が海外の多くの人たちに支えられていたことに気づかされます。

一般公開されている「シュモーハウス」

フロイド・シュモーさん

平和記念公園マップ

❷原爆ドーム

少女の祈り 保存へ動かす

原爆ドームは、1915年に地元産品などを展示する「広島県物産陳列館」として建設されました。被爆時の名称は「広島県産業奨励館」。周辺に木造家屋が並ぶ中、楕円形のドームがひときわ目立つ洋風のデザインは、チェコ出身のヤン・レツルが設計しました。

爆心地から160㍍に位置するため、原爆の爆風と熱線を受け、建物は倒壊。館内にいた人は全員、即死しました。一方で爆風を真上からほぼ垂直に受けたため建物の中央部分は奇跡的に残ります。

原爆ドームが保存されるようになった背景には、1人の少女の存在があります。1歳で被爆し、15年後に白血病で亡くなった楮山ヒロ子さんです。

「あの痛々しい産業奨励館だけが、いつまでも、おそるべき原爆のことを後世にうったえかけてくれるだろう」―。ヒロ子さんが日記に残した言葉に心を動かされた「広島折鶴の会」の子どもたちが保存を求める署名を集めて輪が広がり、66年に、広島市議会が保存を決議。翌年、市は国内外からの寄付で初めて保存工事を行いました。

96年には、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の世界文化遺産にも登録。市は定期的に建物の劣化を調べ、専門家が保存方法を慎重に検討しながら、耐震化や補修工事を施しています。

❸原爆供養塔

内部の納骨堂には、被爆直後の混乱のさなかに火葬された身元不明の遺骨や、引き取り手のない遺骨など、計7万人分の遺骨が納められています。1955年8月に建立されました。

❹慈仙寺跡の墓石

爆心地から約200㍍にあった慈仙寺跡の墓石です。爆風で境内の建物は壊滅し、住職ほか全員が亡くなりました。盛り土をして整備された公園内で唯一当時の地面が残っています。

❺原爆慰霊碑

正式名称は「広島平和都市記念碑」。1952年に完成し、劣化を防ぐため85年にコンクリート製から御影石製に造り替えられました。アーチ形の碑の下には「安らかに眠って下さい　過ちは繰返しませぬから」と碑文を刻んだ石室があり、中に原爆死没者名簿が納められています。

❻広島二中原爆慰霊碑

建物疎開作業の前に、碑の周辺の川岸で整列していた広島二中(現観音高)の1年生の大半が即死しました。碑の裏面には亡くなった生徒、職員352人の名前が刻まれています。

❼広島市立高女原爆慰霊碑

広島市立高女(現舟入高)は建物疎開作業中の1、2年生たち676人が亡くなりました。碑が建てられた1948年は米軍の占領下にあって原爆被害について自由に語ることが規制されていたため、アインシュタインが相対性理論から導き、原爆製造にも応用された公式「$E=MC^2$」が使われました。

公園地下に繁華街眠る

平和記念公園がある場所には、中島地区と呼ばれるにぎやかな繁華街がありました。かつては、映画館やカフェ、病院や寺院などが並び、約4400人が暮らしていたのです。原爆により、大半が爆心地から500㍍以内にあった中島地区は壊滅しました。

原爆資料館本館の耐震化工事に合わせ、広島市は、2015年秋から本館下の一帯で発掘調査をしました。すると、銭湯の浴室の白いタイルや、民家の中庭の池の跡、焼け焦げたしゃもじなどが出てきました。当時の町並みや暮らしが明らかになったのです。

被爆前の中島地区の様子は、アニメ映画「この世界の片隅に」でも描かれています。市は本年度も発掘調査をする予定で、中島地区の遺構の一部を保存し、20年度に一般公開する計画です。たくさんの人が、公園の地下に眠る街を通して原爆の惨禍を感じる場所になることでしょう。

炭化した木製しゃもじが発掘された民家の跡地（2016年3月）

原爆と平和 本を読んで考える

記者らが選ぶこの一冊

原爆市長 復刻版　浜井信三

復興目指す行政の奮闘

「原爆市長」と言われた浜井信三さん。タイトルから1945年8月6日に広島市長だったかと思うかもしれませんが、そうではありません。被爆時には市の課長でした。その後、47年に市長となります。41歳のときでした。

一発の核兵器は多くの命を奪い、町並みを消滅させました。「やらなければならないことが無限にある」状態の中、「公共のために働くもの」がどうやって市民生活を維持し、復興させていくか。その過程が描かれています。

食料や衣服などの生活用品、家を再建するための木材…。それらをどうやって入手していったかが、行政はもとより軍関係や経済界の人々との会話などを通して生き生きと描かれています。

もともと「原爆市長」は55年に中国新聞夕刊で「市政秘話」として74回連載された記事をベースとして67年、出版されました。現在の本は、2011年3月の東日本大震災後、被爆後の広島のまちづくりや復興のプロセスが東北でも役立つのではないかとの思いから、有志が復刻させたものです。

国内外から今、広島を訪れる人が増えています。初めての人は一様に、復興緑多い町並みに驚きます。ここに至るまでに、政財官の多くの人たちの復興にかける志と苦労がありました。そのことが再認識できます。英語版もあり、復興について研修に訪れる海外の人にも参考になることでしょう。（吉原圭介）

広島の木に会いにいく　石田優子

希望与えた被爆樹木

原爆の惨禍を乗り越えた「被爆樹木」。広島市に登録されている被爆樹木は現在、約160本です。この本は、被爆アオギリの下で、被爆体験を証言し続けた故沼田鈴子さんとの出会いをきっかけに、著者が市内の被爆樹木を巡り、木にまつわる人々の思いをつづっています。

被爆樹木を長年見守る樹木医の案内で、平和大通り一帯や広島城周辺を歩きます。爆心地に最も近いシダレヤナギや、原爆から逃れた人が集まった縮景園のイチョウ…。よく見てみると、爆心地側の根の張り方が少なかったり、変わった形をした枝が伸びていたりして、原爆の爪痕が今も残っているのが分かります。

石田さんは、爆心地から約1・8キロの比治山のふもとに残るソメイヨシノの治療にも立ち合います。被爆して傷ついても、新しい芽を出し続けてきた被爆樹木の生命力は、多くの被爆者に希望を与えました。

石田さんは「木にそっと近づいてふれてほしい。目をとじて、木が根をはっている土を感じて」と語り掛けます。被爆樹木は、原爆で人や動物、植物が受けた痛み、平和の尊さを訴えています。（新山京子）

花の命は短かくて 原爆乙女の手記　小島順編

女性15人の苦しみ描く

この手記をつづったのは15人の女性。うち14人は「原爆乙女」と呼ばれた、被爆した女性たちです。

自宅や勤労奉仕の現場など、それぞれの場所で「何だろう？」と晴れた空を見上げた瞬間から人生は一転します。赤黒い焼け野原を人々がさまようさまは、まるで「地獄絵図」だったそうです。目をそむけたくなるような描写が続きます。

そしてその後、被爆後の苦しい治療に耐え、奇跡的に回復した彼女たちが味わったのは「生きる苦しみ」でした。家族を失った悲しみ、親戚との肩身の狭い生活、思うように体を動かせないやるせなさ…。ガラスに映った変わり果てた自分の顔を見て少女が涙する一文には、胸が痛みます。

私たちが笑顔になれるのはどんな時でしょうか。幸せを感じるためには、自分に自信が持て、今の自分を好きだと言えることが不可欠です。だからこそ顔のやけどは、多感な時期の彼女たちの心をむしばみ、笑顔を奪ったのでしょう。

この本を読むと、原爆被害を「学校で習う歴史の一部」としてではなく、「15人の女性の人生」と捉えることができます。自分に重ねて読み進めることは苦しいですが、その分、身近な問題として平和について考えられると思います。彼女たちが被爆した時と同年代の中高校生にぜひ読んでほしい一冊です。（元ジュニアライター、安田女子大1年沖野加奈＝写真）

ほかに読みたい本

【フンフィクション】
広島第一県女二年六組　森脇瑤子の日記（細川浩史・亀井博編）
広島第二県女二年西組―原爆で死んだ級友たち（関千枝子）
いしぶみ　広島二中一年生全滅の記録（広島テレビ放送編）
ヒロシマ日記（蜂谷道彦）
ヒロシマ（ジョン・ハーシー）
爆心地ヒロシマに入る（林重男）
ヒロシマ・ノート（大江健三郎）
空白の天気図「少年T」のヒロシマ（柳田邦男）
折り鶴の子どもたち（那須正幹）
原爆で死んだ米兵秘史（森重昭）
地図から消された島―大久野島毒ガス工場（武田英子）
アンネの日記（アンネ・フランク）
六千人の命のビザ（杉原幸子）
ホセ・ムヒカ　世界でいちばん貧しい大統領（アンドレス・ダンサ、エルネスト・トゥルボヴィッツ）
ひろしま国　10代がつくる平和新聞（中国新聞社編）

【文学作品】
屍の街（大田洋子）
長崎の鐘／この子を残して（永井隆）
黒い雨（井伏鱒二）
紙屋町さくらホテル（井上ひさし）
娘に語る祖国（つかこうへい）
彼岸花はきつねのかんざし（朽木祥）

【漫画】
総員玉砕せよ！／コミック昭和史（水木しげる）
広島カープ誕生物語（中沢啓治）
君がくれた太陽（松尾しより）
生きるんだ／母ちゃんの祈り（ぢとう和）
まんがで語りつぐ　広島の復興（手塚プロダクション・青木健生）

平和学習活性化の研究者

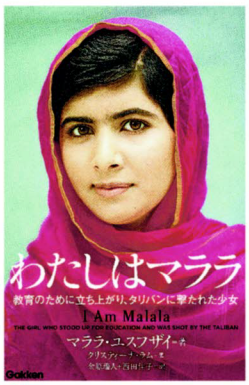
久保田智子さん(42)＝東京都

元ＴＢＳアナウンサー。「どうぶつ奇想天外！」「筑紫哲也のニュース23」「報道特集」などを担当し、ニューヨーク特派員や政治部記者も経験した。2019年米コロンビア大で修士号を取得。現在は東京大学学際情報学府博士課程で、被爆者のオーラルヒストリーやインタビューを通した平和学習の活性化を研究している。東広島市出身。

元アナウンサーおすすめ

わたしはマララ

マララ・ユスフザイ



無限の可能性 気づいて

「そんな力はないと思わないで。自分には無限の可能性があるということに、どうか気づいてください」

この本の著者マララ・ユスフザイさんの言葉です。皆さんとそんなに変わらない17歳の時にノーベル平和賞を受賞しました。自分とは別世界の人だと感じますか？

この本を通してマララさんはみなさんも同じように世界を変えることができると訴えます。

マララさんがなぜ教育のために立ち上がったのか、15歳で下校途中に頭を撃たれ瀕死の状態になり生活がどう変わったのか、その経験を通して今どんなことを考えているかがつづられたこの本。私たち一人一人が変わることで世界を変えられる、大切なのは「気づく」ことなのだと教えてくれます。

「気づく」とは何でしょうか？

マララさんが育ったパキスタンでは、女の子は教育を受ける必要はないと考えられていました。でもマララさんはそれはおかしいと考え、学校に通います。当たり前とされていたことが、当たり前でないと気づいたのです。そして立ち上がりました。

どんな社会にも、それが当たり前だと受け止めると、思考が停止する危険があります。かつて日本が戦争に突き進んだのも、それが無謀だと気づけなかったからです。当たり前に疑問を持ち、気づく。私たち一人一人が平和のためにできる大切なことだと思います。「わたしはマララ」は、あなたもマララなのだと、みなさんに勇気を与えてくれる本です。

◇

◎その日東京駅五時二十五分発　（西川美和）
◎戦争童話集　（野坂昭如）
◎夜と霧　（フランクル）

ヒロシマを語り継ぐ教師の会事務局長

梶矢文昭さん(80)＝広島市安佐南区

元小学校教師。荒神町国民学校１年のときに大須賀分散授業所で被爆した。倒壊した建物から懸命に抜け出し、被爆者の流れに交じって二葉山中腹に逃げた。同じ授業所にいた姉や友人は即死だった。教え子に、「８時15分　ヒロシマで生きぬいて許す心」の著書がある心理学者の美甘章子さんたちがいる。

被爆者おすすめ

この世界の片隅に

こうの史代

心に響くすずの優しさ

「この世界の片隅に」のコミックは映画の前に読んでいた。映画も見た。満席札止めも数度あったが、見るたび、読むたびに新しいものを見つけ、心に響くものがあった。

原爆被災について、特に下巻「20年8月」以降に強い関心があった。被爆前の7時31分、空襲の警戒警報が解除され出勤する男たちとの会話、呉での状況、思いなど、よくもここまでと感服して読んだ。何度読んでも見ても応えてくれる。

ただコミックでは描かれ、映画では取り上げられていない部分には、どうしてという思いは残った。上映時間との闘いだったのだろう。

終章の「しあはせの手紙」の部分、原爆被災で孤児になった女の子にすずさんが掛ける「あんた…」「よう広島で生きとってくれんさったね」の言葉に涙がにじんだ。被爆の時の人々のことを思い出した。「よう広島で生きとったね」ではない。ましてや「うちの娘は死んだのに、あんたは生き残っとって」など、被爆生存者を苦しめ続けた言葉でもない。

一人で1回で読み切るには惜しい図書である。もちろんそれでも良いが、読書会などで意見を交わし、みんなで読みあっていくに値する本である。

◇

◎夏の花　（原民喜）
◎原爆の子　（長田新編）
◎8時15分　ヒロシマで生きぬいて許す心　（美甘章子）

被爆体験の継承をテーマにした漫画を、広島市の「被爆体験伝承者」を目指す大河原こころさん(29)に描いてもらいました。東区の被爆者、山本定男さん(88)の協力を得てストーリーを考えました。主人公の少女が原爆資料館を見学した後にした体験とは…。

漫画「8・6からのメッセージ」

10代の私にできること

「核兵器廃絶」「被爆体験を受け継ぐ」と聞くと、大変なことに思えるかもしれませんが、若者にしかできないことはいくつもあります。皆さんと同じヒロシマの10代が、被爆者から証言を聞いたり、核兵器廃絶を求める署名を集めたりしています。さまざまな活動の中からいくつか例を紹介します。自分に何ができるのか、考えてみませんか。

証言伝えるジュニアライター

中国新聞ジュニアライターは、高校生と中学生が原爆や平和をテーマに自分たちで取材し、記事を書く活動をしています。記事は中国新聞に掲載されます。

月1回の連載「ジュニアライターがゆく」では、原爆を乗り越えた被爆楽器や、被爆地からのカンボジア支援など、幅広い視点で記事を書いています。被爆者の証言を収録する「記憶を受け継ぐ」の取材では、お年寄りから託された平和のメッセージを、子どもの視点から伝えます。

これまで、潘基文（パンキムン）・前国連事務総長や、2017年のノーベル平和賞授賞式で被爆者として初めて演説したカナダ在住のサーロー節子さん(87)たちにインタビュー。核兵器廃絶への思いや、若者への期待の言葉を紙面で紹介しました。

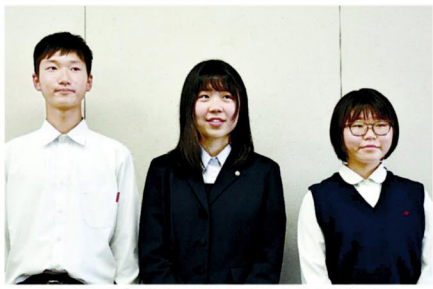
取材後にサーロー節子さん（前列左から2人目）と記念撮影するジュニアライター

高校生平和大使 世界で活躍

全国から選抜された高校生が務める「高校生平和大使」は、長崎で始まった活動です。「高校生1万人署名活動」として核兵器廃絶署名を集め、毎年スイス・ジュネーブの国連欧州本部に赴いて提出しています。

本年度、広島から選ばれたのは、県立広島高2年北畑希実さん、広島大付属高2年松田小春さん、基町高2年牟田悠一郎さんの3人。全国から集まった20人の大使と活動します。北畑さんは「被爆者の生の声を聞ける最後の世代。私の言葉で平和への思いを伝えたい」と抱負を述べました。

昨年は、福山暁の星女子高3年開原弓喜さん、ノートルダム清心高3年下久保理子さん、沼田高3年久保田音美さんが、大使を1年間務めました。ノーベル平和賞受賞団体の非政府組織（NGO）「核兵器廃絶国際キャンペーン」（ICAN（アイキャン））の本部を訪問するなどしました。



本年度の高校生平和大使として活動する左から牟田さん、松田さん、北畑さん

署名キャンペーン 地道な行動

広島や沖縄の中高生による「核廃絶！ヒロシマ・中高生による署名キャンペーン」も頑張っています。生徒たちが定期的に街頭に立ち、平和首長会議（会長・松井一実広島市長）に協力して核兵器廃絶を求める署名活動を展開しています。

署名集めは、原爆や核兵器の問題について関心がない人たちに働き掛ける、地道な行動です。今年5月には、広島女学院高と修道高（広島市中区）、盈進高（福山市）の8人が平和首長会議から核拡散防止条約（NPT）再検討会議の準備委員会が開かれた米ニューヨークの国連本部に派遣されました。署名の目録を提出するとともに、長崎の大学生やドイツの若者たちと「ユースフォーラム」で活動発表をしました。

「ユースフォーラム」で核兵器廃絶への取り組みを発表する広島の高校生たち

被爆樹木・被爆建物

12、13㌻を参考に、次の問いに答えましょう。

問１　広島市は、爆心地からどれくらいまで離れた建物を被爆建物と呼んでいますか。そのうち、原爆投下の第１報が発信されたのはどの建物でしたか。

問２　広島市は、爆心地からどれくらいまで離れた場所にある樹木を被爆樹木と呼んでいますか。

問３　被爆者の北川建次さんの記事を読んで、どんなことを感じましたか。

平和記念公園

16、17、24㌻を読み、次の問いに答えましょう。

問１　原爆ドームは、どのような目的で建設されましたか。また、被爆時はどのような名前でしたか。

問２　原爆ドームが残ったのはなぜでしょうか。

問３　原爆ドームが世界文化遺産に登録されたのはいつの年ですか。　（　　）年

問４　被爆前の平和記念公園はどんな場所でしたか。被爆前のことを知ってもらうため、広島市はどんな計画を進めていますか。

問５　リニューアルした原爆資料館の本館には、原爆犠牲者の遺品が多く展示されています。「実物」の展示にはどのような狙いがあると思いますか。

問６　原爆の子の像の建設は、だれがどんな運動を始めたことがきっかけでしたか。

問７　原爆の子の像にはどんなメッセージが込められていると思いますか。

被爆証言「記憶を受け継ぐ」

２～11㌻を読み、次の問いに答えましょう。

問１　証言者の話の中で、特に心に残った内容を書いてみましょう。その理由も書いてください。

問２　被爆の記憶を受け継ぐために大切なことは何だと思いますか。あなたの考えをまとめましょう。

若い世代の活動

20、21㌻を読み、次の問いに答えましょう。

問１　このマンガを通して大河原こころさんと山本定男さんが伝えたいことは何だと思いますか。

問２　ジュニアライターや高校生平和大使などの活動を参考に、平和のため自分に何ができるのか考えてみましょう。

新聞から

6.15　プロ野球～マツダ
広島×中日　横山竜士
いないと困る新井！し
つこく粘る鯉打線！止
まらぬカープの快進撃
で苦難が続く被災地に
も笑顔咲かす！松山竜
平が技ありアーチ！昭
和５９年以来の日本一
をつかむためのカギは
守り！被爆体験継承す
るためにカープが一役
【中止】ニュース６
7.00字この差◇前と後

問１　「原爆の日」の翌日、2018年８月７日付朝刊のテレビ欄を見てみましょう。平和に関する隠されたメッセージが書かれています。何でしょうか（ヒント・文字を縦に読む）。

問２　テレビ欄にならって、平和にちなんだ文を作ってみましょう。

い	
つ	
ま	
で	
も	
平	
和	
を	
守	
る	

平和にちなんだ文を募集します。優れた作品を、中国新聞ヒロシマ平和メディアセンターのウェブサイト内（http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p＝91248）に順次掲載する予定です。
〒730―8677広島市中区土橋町７の１
中国新聞社ヒロシマ平和メディアセンター
peacemedia@chugoku-np.co.jp
みなさんの学校で「学ぼうヒロシマ」をどのように活用していますか。また、平和を学ぶ学習や行事にどう取り組んでいますか。この新聞に対するご要望も、この連絡先にお寄せください。

協力　日本新聞協会ＮＩＥアドバイザー・堤隆一郎さん、広島国際学院中・高教諭・為重慎一さん

平和学習ワークシート

この平和学習新聞「学ぼうヒロシマ」に書かれていることを参考に、次の問いに答えましょう。

原爆投下の背景と被害

4～6ページの「キーワード」と14、15ページを参考に、次の問いに答えましょう。

問1　原爆が投下される前の広島は、どんな街でしたか。

問2　右の地図から戦争に関係する施設を探し、その名称を書き出しましょう。

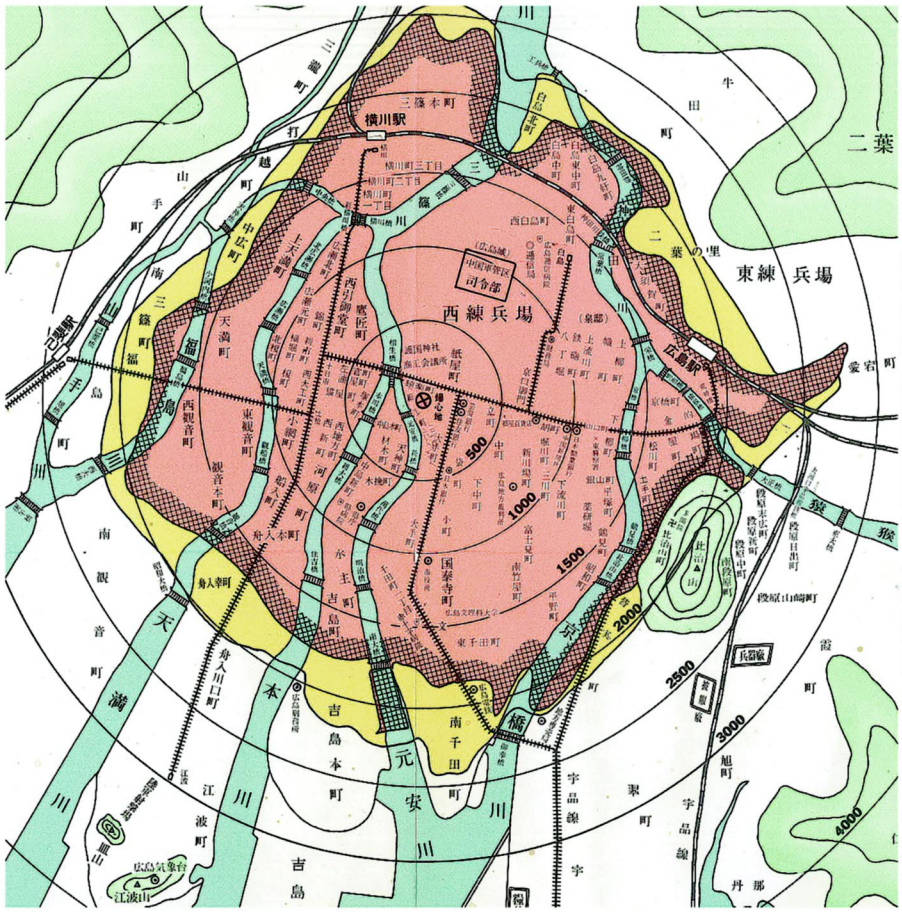
問3　広島と長崎には、原爆がいつ落とされたのでしょう。

広島　1945年（　　）月（　　）日
午前（　　）時（　　）分
長崎　1945年（　　）月（　　）日
午前（　　）時（　　）分

問4　ほかの兵器と比べて、原爆の特徴は何ですか。

問5　地図をもう一度、見てください。原爆で全焼した範囲の半径はおおよそ、どのくらいだったでしょう。

約（　　）m



「広島原爆戦災誌付録の原子爆弾被災状況　広島市街説明図」から。■は全焼区域、■は建物が倒壊した区域

問6　原爆犠牲者や被爆者の中には、どんな国や地域の出身の人たちがいましたか。

問7　原爆は、やけどに加えて、どのような健康への影響をもたらしましたか。

被爆地の復興

14、16ページを参考に、次の問いに答えましょう。

問1　広島の街はどうやって復興できたのでしょうか。

問2　左の写真はマルセル・ジュノー博士が広島に届け、後に原爆資料館に寄贈された物です。博士は原爆が落とされた後の広島に何をしてくれましたか。

問3　米国人のフロイド・シュモーさんは広島で計何棟の家を建てましたか。うち、今も残る1棟は何に使われていますか。

世界の核兵器

15ページを参考に、次の問いに答えましょう。

問1　核兵器を持つ国を挙げてみましょう。

問2　今もなぜ、世界に核兵器が存在すると思いますか。あなたの考えをまとめてください。

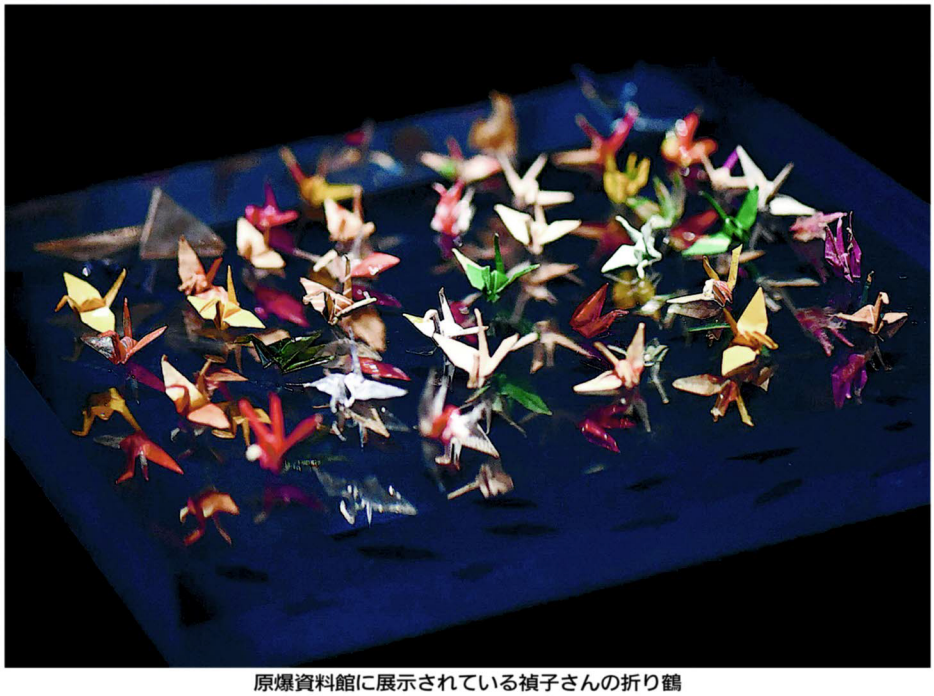
問3　国連で議論して実現した「核兵器禁止条約」とは、何を禁止する条約ですか。

問4　世界の人たちが広島に来ることに、どんな意味があると思いますか。

サダコと折り鶴の物語

2歳で被爆し、10年後に白血病で亡くなった佐々木禎子さんは「生きたい」という願いを込めて、折り鶴を作り続けました。「SADAKO（サダコ）の物語」をきっかけに「ORIZURU（折り鶴）」は今、平和の象徴として、世界中に広がっています。

小学6年の佐々木禎子さん（川野登美子さん提供）



原爆資料館に展示されている禎子さんの折り鶴

禎子さんとは

被爆後も元気に成長した禎子さんは、幟町小（広島市中区）に進学します。足が速く、クラス対抗のリレー選手としても活躍したそうです。ところが、小学6年の時に突然、体調を崩し、広島赤十字病院（現広島赤十字・原爆病院）に入院しました。白血病と診断されたのです。

ある日病院に、名古屋市内の高校からお見舞いとして折り鶴が届いたのをきっかけに、禎子さんも鶴を折り始めます。薬の包みや、お菓子の包装紙を折り紙の代わりにし、病状が悪化する中でも、懸命に折り続けました。

原爆資料館や家族の証言から、禎子さんが折った鶴は1300羽以上に上るとみられています。しかし願いはかなわず、1955年10月25日、禎子さんは息を引き取りました。一部は、原爆資料館本館や、幟町小の「のぼり平和資料室」に展示されています。

像建立 級友が動く

1958年5月5日に完成した、平和記念公園内の「原爆の子の像」。佐々木禎子さんの死を悼んだ同級生たちの呼びかけで募金運動が全国に広がり、建立が実現しました。54年に米国の水爆実験で日本の漁船「第五福竜丸」が被曝（ひばく）し、船員の久保山愛吉さんが亡くなったことを受け、原水爆禁止運動が盛り上がっていました。これが、子どもたちの運動を後押ししたのです。

原爆の子の像

高さ9メートルの像の頂上部分には、折り鶴を天に掲げるブロンズ像の少女が立っています。禎子さんがモデルだといわれますが、原爆の犠牲になったすべての子どもの象徴です。

世界から届く折り鶴

原爆の子の像には、年間約1千万羽、10トンの折り鶴がささげられています。広島市が集計を始めた2002年度以降の累計は、2億1240万羽にもなるそうです。周囲に設置されたブースには、修学旅行生や海外の学生などが作った千羽鶴や、折り鶴アートが飾られています。

ブース内の折り鶴は再生紙にリサイクルし、ノートやはがきなどに生まれ変わって販売されています。米国のオバマ前大統領も16年5月に広島市を訪れた際、4羽の折り鶴を市に寄贈しました。うち2羽は原爆資料館に展示されています。

原爆の子の像にささげられた折り鶴

紙面編集・重田広志、宮野史康